

「放課後子ども教室」における プログラム開発のために

平成22年9月

文部科学省生涯学習政策局生涯学習調査官

金藤 ふゆ子

目次

はじめに ～放課後子ども教室に期待されるもの～	2
-------------------------	---

プログラム開発理論

はじめに	6
第1ステップ	8
第2ステップ	10
第3ステップ	12
第4ステップ	14
第5ステップ	16

プログラム事例編

計画の種類と関連について	20
年間活動計画の例	21
月間活動計画の例	25
週刊活動計画の例	27
個別プログラム例	29

個別プログラム例

自然体験・環境学習関連	34
教科に関する学習関連	37
伝統文化継承	39
異文化理解	40
食・料理体験	42
異年齢・世代間の交流	44

ふり返り方と調査票

ふり返り方	48
調査票例（児童）	50
調査票例（活動支援者）	53
チェックリスト（企画者）	55

はじめに

—放課後子ども教室の活動に期待されるもの—

1. 放課後子ども教室と現代の子どもを取り巻く状況との関連について

「放課後子ども教室推進事業」は、平成19年度より開始された放課後子どもプランの一環として文部科学省の推進する事業です。これは学校・家庭・地域の連携による教育の推進を規定した教育基本法第13条の具体化を図る施策としても位置づけられる事業です。

当該事業は、放課後や週末などに市町村が主体となり、地域社会の中に安全で子どもが安心して活動拠点（居場所）を設け、保護者や地域の方々、ボランティアの協力を得て、学習やスポーツ、文化芸術活動、地域の方との交流活動など多様な体験や学習の機会を子どもたちに提供することを目的としています。平成20年度は約7,700ヶ所、平成21年度は約8,700ヶ所で実施されており、全国的な普及が確実に進められています。

放課後子ども教室の活動が今、なぜ必要とされるのでしょうか。それは現代の子どもを取り巻く環境がさまざまな面で変化し、子どもにとって安心・安全な居場所づくりが不可欠になっているためであり、それと同時に子ども自身の多様な体験不足が深刻な状況にあり、その結果さまざまな問題が浮かび上がってきていると考えられるためです。環境変化に伴う子どもの体験不足には、例えば以下のような事項があげられるでしょう。

- 少子化による家庭内での兄弟姉妹との切磋琢磨の経験の減少、地域における同年齢や異年齢の子どもとの交流不足
- 都市化の進展による子どもの自然体験の不足、集団遊びの経験不足
- 核家族化の進展による異年齢世代（地域の大人、祖父母・曾祖父母世代、青年期のお兄さんお姉さん等）との交流不足
- ゲームやインターネットの普及などによるバーチャルな体験の過度の増加と実体験不足
- 家庭の耐久消費財の普及や生活環境の変化によるお手伝いなど生活体験の不足
- 地域の祭りや行事などを通じての、地域の伝統文化・伝承に触れる体験の不足

2. 放課後子ども教室の実施で期待される効果について

放課後に子どもや保護者が安心できる居場所を確保し、そこで子どもの集団形成を意識した体験活動等を実施することにより、子どもたちには以下のような効果が生まれると期待されています。

- 子どもの活動に対する興味・関心・意欲の向上
- 自然・社会・伝統芸能・遊び等に関する知識の増加や技術・技能の向上
- 子どもの自主性・自発性の育成
- 異年齢集団の活動を通じた我慢する力を養うなど耐性の強化・伸長
- 地域の大人との交流などによる社会性の育成
- 大人や異年齢の子どもとの交流を通じた規範意識や協調性の高揚

放課後子ども教室の推進は、その活動への取組を通じて保護者や地域住民が積極的に地域の子育てに携わる意識を高め、さらには学校教育の諸活動に対しても保護者や地域住民の活動支援の意識や行動の増加といった副次的効果も生まれると期待されています。

このように学校、家庭、地域が一体となった地域の特色を生かした放課後子ども教室の取り組みは、子どもに対する効果と共に、保護者や地域住民の意識・行動にも影響を及ぼし、最終的に地域全体で子ども達を育む仕組みづくりにつながると考えられます。

第 I 部 プログラム開発理論編



1. プログラム開発の基本的ステップについて

はじめに

子どもを対象とするプログラム開発には、いくつかの基本的ステップがあります。ここでは個別の活動に関するプログラム開発の理論を概観します。

子どもを対象とするプログラム開発に携わる方々が、プログラム開発の基本的ステップを理解した上で実際のプログラムを計画し、実施し、さらにそのふり返りを行うことによって、より優れたプログラムの実現可能性が高くなると考えられます。

図1に示すものがプログラム開発の5段階の基本的ステップを示したものです。それらのステップは、実際のプログラム開発では複数段階の作業を同時に行う場合もあり、各段階の作業を必ず順序通りに行わなければならないものではありません。各ステップの作業は、プログラムによって臨機応変に順序の変更もあり得ると考えて下さい。

■プログラム開発の基本的ステップ

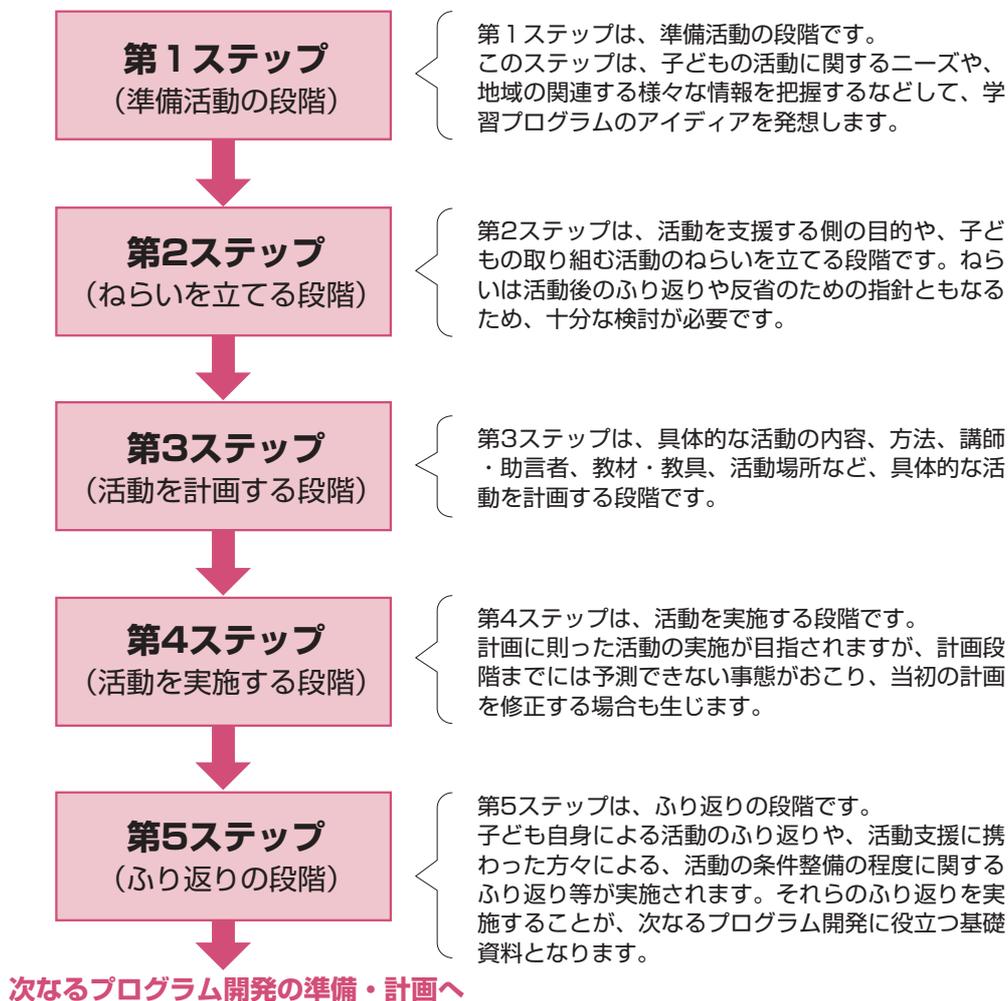


図1 プログラム開発の基本的プロセス

プログラム開発過程は、図2のようにプログラムの計画・実施・ふり返りを継続的に行うスパイラル（螺旋状）のモデル図として示すことも可能です。

初期に計画・実施・ふり返りを行ったプログラムの結果は、次なるプログラム開発の計画・実施・ふり返りに活かされます。このようなスパイラルな過程としてプログラム開発に取り組むことにより、当初のプログラムの問題点は克服されて、プログラムは質的に向上していくことが期待されます。

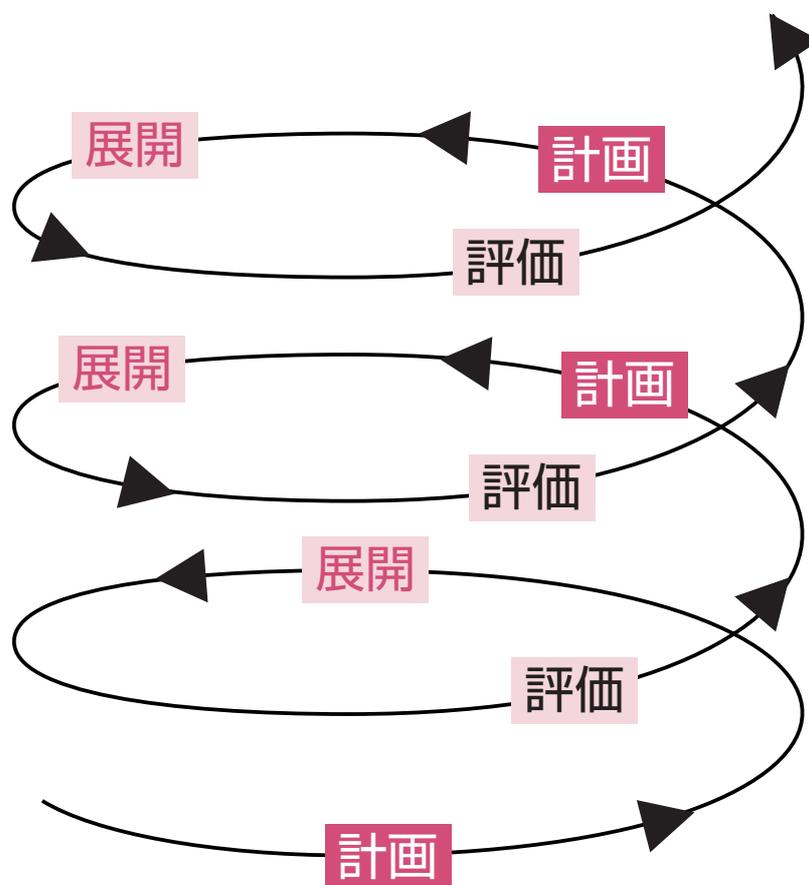


図2 プログラム開発のスパイラル・モデル

第1 ステップ

準備活動

子どもを対象とするさまざまな活動を計画するためには、第1のステップで多様な情報収集を行うことが重要です。情報収集にもさまざまな取り組み方がありますが、例えば他の放課後子ども教室や放課後児童クラブと情報交換をして、過去に実施されたプログラムに関する資料を収集したり、関係する地域の学校や市町村教育委員会にある基礎資料や書籍に目を通したり、学校の協力を得て子どもや保護者の希望を調べるアンケート調査を実施するなど、第1ステップの具体例と言えるでしょう。

プログラムの計画にあたっては、子どもや保護者の希望を重視すると共に、学校や地域が直面している問題、さらには子どもや保護者にとって解決が求められる課題を検討することも重要です。

即ち、プログラム開発にあたっては、子どもや保護者の個人の要望（ニーズ）に対応することが重要であると共に、地域や学校さらには子どもや保護者の問題や課題など、言わば社会の教育的要請（シーズ）といえる問題や課題に対応することも重要であり、そのバランスを考えることが不可欠です。具体的な準備活動として期待される作業の具体例を示すと、以下のようになるでしょう。

■ 準備活動として期待される作業の具体例

- (1) 保護者や子どもを対象として、放課後子ども教室で取り組みたい活動内容や、これまでにチャレンジしたいと思ったことなどに関する希望調査を実施する。
- (2) 地域の他の放課後子ども教室や放課後児童クラブなどで過去に実施したプログラムの事例を収集する。
- (3) 放課後子ども教室の活動支援の可能性のある地域の人材（〇〇名人など）や、活動実施の可能性のある場所（学校内外の施設、自然、広場など）を探す。
- (4) 行政がこれまでに実施した子どもの実態や地域の現状、地域の課題等に関する資料（調査結果等を含む）を活用する。
- (5) これまでに提出された答申等を検討し、地域の実情や子どもの実態を踏まえて期待される活動を検討する。
- (6) 地域の学校、企業、NPO、他の行政関連部局、地域の自治会やPTA等関連団体、社会教育関連施設等が実施する、子どもを対象とするプログラムに関する資料を収集し、地域で取り組みの期待される活動や取り組みの少ない活動の実態を把握する。
- (7) 放課後子ども教室の活動の意義を理解し、人的・物的・財政的支援を得られる可能性のある企業、NPO、他の行政関連部局、地域の自治体やPTA等関連団体、小・中・高校や大学等の学校教育施設、社会教育施設、地域住民に対して、協力・支援を求める。
- (8) 特に低学年の子どもを対象とする活動では、安心・安全を確保するための留意点（p14参照）を考慮すると共に、子どもの保険や活動支援者の保険の手当を忘れずに行う。
- (9) 実施したいプログラムには、最低限いかなる人的・物的・財政的な裏付けが必要かを考える。その作業を踏まえて、実施したいプログラムの実現可能性を検討する。

■第1ステップを具体的に進める手がかり

- (1) プログラムを決定するにあたっては、子どもを対象とする簡単なアンケートを実施してみましょう。自然体験、社会体験、文化・伝承遊び、地域の子どもや大人との交流などの中から子どもがどのような活動をやりたいかを問うアンケートによって、放課後子ども教室の活動に子どもが何を期待しているのかが明らかになるでしょう。
- (2) 活動支援に携わる指導員や講師、さらには運営にあたるボランティアなどを交えた企画（委員会）で話し合いを行うことは、プログラムを検討する準備活動として望ましい取り組みです。
- (3) 地域には、当該地域の実情を把握するために役立つ調査結果などの資料が、既に存在する場合があります。市町村教育委員会やコーディネータの協力を得て、それらの資料に目を通すことにより、プログラムを計画するための有効な情報や手がかりが得られる場合が多くあります。
- (4) 市町村教育委員会や都道府県教育委員会等には、様々な分野の専門性を有する「指導者・助言者リスト」がある場合があります。例えば自治体によっては「理科」「算数」等の教科別指導者リストや、体験的学習の指導者リストがあります。それらの人材リストを活用することも、準備活動の一つとして重要と言えるでしょう。

コラム1

Q 企画者が目を通しておくと良い調査や取り組むと良い情報収集作業とは、具体的にどのようなものがありますか？

A

- ・各都道府県や市町村には、過去に実施された「市民の生涯学習の実態や希望に関する調査」といったものが存在する場合があります。それらの地方公共団体の実施した調査結果は、地域の実情を理解したり、市民の学習希望を理解したり、子どもの活動支援の可能性を知る手がかりとなるでしょう。
- ・学校は、保護者を対象として授業評価や学校への保護者の期待を調べるためのアンケート調査を実施しています。教育委員会や学校関係者の協力を得て、そのような保護者を対象に実施した調査結果を見せて頂くことも、放課後子ども教室のプログラム開発のための基礎的な情報収集になるでしょう。
- ・学校の先生方は、地域の実情や子どもの特性を良く理解しています。学校関係職員との話し合いは、放課後活動のプログラム開発において有効な情報が得られる作業と言えるでしょう。

第2 ステップ

ねらいをたてる

第2ステップは子どもにとっての活動のねらいや、支援者にとっての活動支援のねらいをたてる段階です。ねらいをたてることは、子どもにとっても放課後活動の支援に携わる者にとっても活動の指針となり重要です。さらに明文化されたねらいは、子どもや活動支援者にとって、活動終了時のふり返しを行うために不可欠となります。

子どもにとってのプログラムのねらいは、子どもを主語として、知識・技能の習得や関心・意欲・態度がどのように変容するかといった観点を踏まえて明文化しましょう。また放課後子ども教室のプログラムは、学習、スポーツ、交流活動など多様な内容での実施が可能ですから、ねらいはプログラムの内容に添った適切な表現を用いることが必要です。

プログラムを計画・実施する活動支援者のねらいの設定にあたっては、できるだけ抽象的な表現は避けて、具体的で誰もが分かるねらいの明文化を心がけましょう。それによって、子どもの活動支援に携わる者の共通理解も図られることになり、ねらいを立てることが実際の指導・助言にも活かされるでしょう。

第2ステップは、プログラムのテーマも設定する段階でもあります。プログラムのテーマの設定にあたっては、後述するような留意事項に配慮して下さい。

■子どもにとってのねらいを設定する上での留意事項

- (1) 子どもにとってのねらいは子どもが活動の結果として何を学び、何を体験し、それによってどのような知識を獲得し行動・態度が変容するかを、子どもを主語として具体的に記述するものです。あいまいな表現は避けて、具体的にねらいを記述することを心がけましょう。
- (2) ねらいは、子どもが集団で活動する場合には多くの子どもにとって達成することが可能なものを設定しましょう。多くの子どもにとって達成することの難しいねらいを設定すれば、子どものやる気を削ぐ可能性もあり注意が必要です。
- (3) 子どもが個別に活動する場合には、それぞれの子どもの特性に配慮してねらいを設定しましょう。
- (4) ねらいは、焦点を絞って記述することが重要です。総花的にねらいを羅列するのではなく、確実に達成を目指そうとするねらいに絞り込んで記述しましょう。
- (5) ねらいは、得られた学習成果がその後の子どもの学校生活や家庭での日常生活にどのように役立てられるのかといった、学習成果の活用や学習の継続についても記述することが望まれます。
- (6) ねらいの設定にあたっては、子どもとの話し合いを行い、子どもの要望を踏まえて検討しましょう。
- (7) ねらいの設定にあたっては、地域の方々や学校関係者との話し合いを行い、子どもの様々な課題を検討することも極めて重要です。

■プログラムのテーマ設定上の留意事項

- (1) プログラムのテーマは、子どもにとって魅力ある文章表現を用いるように心がけましょう。魅力あるテーマの設定が、子どものやる気を喚起し、積極的な活動につながるきっかけとなります。
- (2) 1つのプログラムが複数回で構成される場合、各回（コマ）のテーマを明文化して設定することは、子どもや保護者にとってみると各回の活動が想定できるため安心感を与えることとなります。また指導・助言者にとってみれば、指導・助言のポイントが絞られる効果も期待できます。複数回（コマ）で構成されるプログラムの場合には、各回（コマ）別のテーマ設定も検討しましょう。

■ねらいの設定を具体的に進める手がかり

- (1) 子どもを主語にしていくつかのねらいをまず暫定的に設定してみましょう。その中から子どもと話し合いを行う中で「年間目標」、「月間目標」、「週間目標」や「各プログラム別のねらい・目標」を設定しましょう。
- (2) 地域の人々、保護者、学校関係者の意見を取り入れたねらいを1つ設定しましょう。
- (3) ねらいの設定にあたっては、多くの子どもにとって達成可能なものか否かを複数のメンバーで確認しましょう。
- (4) ねらいの設定は1つの活動に1つないし、2つ程度を目安に設定することが望ましいでしょう。沢山のねらいを1つの活動について立てることは、活動の一貫性が損なわれる恐れがあります。
- (5) 具体的に設定されたねらいを活用すれば、活動終了時のふり返りにおいてそれを活用することが出来ます。ふり返りに活用できるねらい・目標は、優れたねらい・目標と言えるでしょう。

コラム2

Q 体験的活動のプログラムのテーマにはどのようなものがありますか？具体例を教えてください。

A 体験活動にも様々なものがあります。子どもがやってみたいと思うような表現を工夫しましょう。

例えば、「手作りおやつで君もパティシエになろう！」「〇〇小学校のけん玉チャンピオンを目指そう」「オーガニックの野菜作りにチャレンジ！」「茶道のお作法を体験しよう」「囲碁・将棋でおじいちゃんに挑戦だ！」「自然観察で〇〇小学校の昆虫博士になろう」等々、子どもの興味・関心を引くテーマづくりに取り組んで下さい。

第3 ステップ

活動を計画する

第3ステップは、具体的に活動内容や活動方法等の計画を行う段階です。活動計画を十分に検討することが、優れたプログラムの実現には不可欠です。ここでは、計画にあたっての留意事項をいくつかの観点から述べることにしましょう。

■活動内容の計画にあたっての留意事項

- (1) 計画にあたり、活動内容として何をどこまで取り上げるべきかといった、内容の横の広がり、取り上げた内容をどのような時系列的つながりや順序で配列するかといった、縦のつながりを十分に検討して下さい。
- (2) それらの検討を十分に行えば「場当たりの」な内容や、プログラムのねらい・目標に合致しない活動を避けることができるでしょう。
- (3) 活動内容は、子どもの学習経験の有無や、レベルに適合するように配慮して選択して下さい。子どもの学習経験や活動のレベルに違いがある場合は、グループ別の活動を行うなどの対応も考えられます。
- (4) 活動内容の配列は、活動終了後のひろがりやつながりも考慮して、活動の継続を可能とするようにしましょう。
- (5) 様々な理由によって、当初の計画通りに学習活動を実施できなくなる場合もあります。例えば、野外活動を計画したが雨天で実施できなくなるといったこともその一例です。活動の実施にあたっては、計画した内容を変更する必要が生じる場合の代替案（当初の計画案に代わる第2案、第3案）を、予め検討しておくことも重要です。
- (6) 指導・助言にあたっては、地域住民、保護者の協力を得る他、地域の大学生や高校生など、学生ボランティアの支援を得ることも検討すべき課題です。ボランティア募集にあたっては、市町村教育委員会を通じて地域の大学・短大等へ働きかけるなど、学生ボランティアの支援・協力を求める工夫も具体的に検討してみましょう。
- (7) 放課後子ども教室の活動を子どもにとって有意義なものとするためには、組織化された活動（準備活動を実施し、ねらいを設定した計画に基づく活動）と、非組織的活動（子どもの自由遊び等）とのバランスをとる視点が重要です。

■活動方法の計画にあたっての留意事項

- (1) プログラム開発の際、内容の選択と共に重要なのが活動方法の選択・計画です。
- (2) 体験的活動を重視するとは言っても、「工作」や「運動」などの実習や実技ばかりを続けて行うことは、活動のワンパターン化につながります。体験的活動は実習・実技の他、子ども間の話し合いや、発表、自然観察・見学、視聴覚教材を活用する等、多様な方法の採用を心がけましょう。

- (3) 活動方法の計画にあたっては、情報化の進展に対応する工夫も検討して下さい。例えば、マルチメディアを活用して他の地域の学校の子どもと共に同じ活動に取り組む、といった方法も考えられるでしょう。
- (4) さらには地域の博物館、美術館、動植物園、水族館などの社会教育施設や、各種研究所、大学等に働きかけて、子どもの活動をサポートする専門性を有する人材を発掘しましょう。そのような社会教育施設や研究所、学校等の関連施設・機関から人的支援が得られるようなネットワークを形成することにより、子どもの活動には深まりや広がり生まれ、優れたプログラム開発につながる可能性が高まります。

■ 計画の主体についての留意事項

- (1) 活動計画においては、指導・助言にあたる大人のみで計画を練るばかりでなく、子どもの計画段階からの参加を促進しましょう。「子ども企画会」などを組織することも望ましい取り組みです。
- (2) 計画段階からの子どもの参加は、子どもの自主性を高めると共に、活動終了後の達成感や成就感を高める効果も期待されます。
- (3) 保護者や地域住民、大学生などのボランティアについても、プログラムの計画段階からの参加を求めることが重要です。担当のスタッフのみでなく、複数の関係者との話し合いの中から、新しいアイデアが生まれ、優れたプログラムの計画・実施が実現するでしょう。
- (4) 指導・助言者や計画に協力を求めるボランティア個人の負担が過重とならないように配慮しましょう。

コラム3



子ども対象のプログラム開発への効果が期待できる、連携・協力が望まれる施設・機関とはどのようなものがありますか？



地域には様々な社会教育関連施設・機関があり、それらの施設・機関との連携・協力によって、子どものプログラム開発に生かせる優れたアイデアや助言が得られるでしょう。例えば、地域の公立の図書館、博物館、美術館や公民館などは、全て公的社会教育施設です。それらの施設には、図書館司書、学芸員、社会教育主事といった専門職員が配置されている場合も多くあります。そうした専門性を有する職員に相談することから、地域の他の施設・機関との連携を考えてみることも良いでしょう。

また、学校の場合にも、専門性を有する教員がいます。地域の学校に協力を求めることによってプログラムのアイデアや指導者派遣など様々な効果が期待できるでしょう。特に近年、大学は地域への貢献が求められているため、地域連携室といった名称の部署を設けている場合もあります。そうした地域連携や地域貢献を受け持つ大学の関連部署に、子どものプログラム開発の相談を投げかけてみてはいかがでしょうか。その場合、漠然とした内容で相談するのではなく、プログラム内容に対応する適切な専門性を有する職員を紹介して欲しいといったように、より具体的な内容で相談することが望ましいでしょう。

第4 ステップ

活動を実施する

第4ステップは、さまざまな活動を実際に行う段階です。第3ステップの計画に則り、活動を実施することを原則とします。しかし、計画段階までには予測できない状況の変化が生じ、当初の計画を変更する必要がある場合もあります。

第4ステップは、そのような様々な状況の変化にも対応しながら、子どもにとって最適な学習活動を実施することが求められます。

活動を実施する際の留意事項

- (1) 放課後子ども教室における子どもの活動は、学習、スポーツ、文化・交流活動など多様な活動が考えられます。指導・助言者の担当を明確化して、きめ細かい指導が実施できるように配慮することが重要です。そのための指導体制の確立や、ボランティアの確保、さらにはボランティアを受け入れるための体制の整備も必要です。
- (2) 一つの放課後子ども教室で、同時に複数の活動を同時並行的に実施する場合には、特に(1)で述べた体制の整備が重要となります。
- (3) 子どもの活動支援に当たる指導・助言者やボランティアは、子どもの活動状況に即してきめ細かい支援ができる十分な人数を確保しましょう。
- (4) 活動の実施にあたっては、異年齢の子どもとの交流を促進する配慮が必要です。例えば、低学年の子どもを中学年や高学年の子どもが支援者となりサポートしたり、中学生と小学生との交流の機会を設けたり、地域の大学生がボランティアとして指導者になる等、柔軟な発想で活動の実施方法を検討することにより、放課後子ども教室の効果をより高め、有意義なプログラムを実現することができるでしょう。

活動実施・運営上の安全確保に関する留意事項

子どもの体験活動の実施にあたっては、安全確保が極めて重要になります。具体的には、以下の事項等について活動の実施前に関係者相互にチェックを行うことが必要です。

- (1) 野外活動の実施にあたっては、活動が低学年の子どもにとっても無理のない範囲であるか否かを十分に検討する。場合によっては低学年、中学年、高学年用に活動内容に差をつけたり、タイムスケジュールを別立てで検討する。
- (2) 金槌やスコップなどの道具を活用する場合は、軍手など手を保護するものを準備し、活動前に付けさせる。
- (3) 低学年の子どもの場合、金槌で釘を打つ際には、予めきりで釘を打つ場所に穴を開けるなど、補助的作業を実施する。
- (4) はさみやカッターなどの刃物を使用したら、もとの場所に必ず戻す習慣をつける。
- (5) 野外活動に出かける前には、必ずトイレに行かせる。
- (6) 野外活動に出かける際には、虫に刺されたり、けがを防ぐために長ズボン・長袖の服装を準備するよう指導する。
- (7) 野外活動に出かける際には、指導者は応急処置用の消毒液・ばんそうこう・薬などを準備する。

■第4ステップを具体的に進める手がかり

- (1) 大学生のボランティアを活用する場合は、地域の大学に連携・協力を求める働きかけを行い、継続的支援を得られる方法を工夫しましょう。例えば大学との提携により、放課後子ども教室を教職を目指す学生のための学習の場として位置づける仕組みづくりを検討することも良いでしょう。
- (2) 放課後子ども教室の指導・助言を担当する地域の方々に対する研修機会を準備しましょう。地域の方々を対象とする学びの場（子ども理解、スキルアップ研修、レベルアップ研修など）を実施することは、活動支援の質的向上、指導・助言者間の交流や情報交換の促進、プログラムのマンネリ化の防止など様々な効果が期待できます。

■プログラム運営上のスタッフの確認事項

プログラムの実際の計画、運営にあたっては、下記事項の確認や検討をスタッフ相互で行うことが必要となります。

- (1) プログラム参加対象者、対象年齢層、人数の予測、及び参加者の確定
- (2) 活動支援に必要なスタッフの人数と役割の明確化
- (3) 活動に必要な費用の算出、及び算出された費用の捻出方法の検討
- (4) 費用を徴収する場合の徴収方法
- (5) 参加者の募集方法、募集時期、募集期間
- (6) 参加者が定員を上回る場合の参加者決定の方法、及び決定通知の方法
- (7) 予測される事故、トラブルの予測、及びそれらの問題状況への対処方法
- (8) 当日の子どもの集合時間（スタッフの集合時間）

コラム4



指導・助言者の研修会や情報交換会はどのように行えば良いのですか



指導・助言やボランティアに携わる地域の方々は、子どもと触れ合う中でいろいろと貴重な情報を有していることが多くあります。あまり肩肘を張らずに「研修会」や「情報交換会」は、日頃の不安や問題点などについての話し合いの場を設定することからはじめてはいかがでしょうか。

さらに、異なる地域の放課後子ども教室の関係者との意見交換も、日頃当たり前になっている活動を見直す良い機会になったり、関連する情報の収集も可能となるでしょう。そうした会の発足を手がかりとして、活動支援に携わる関係者の研修を考えることも一つの方法と言えるでしょう。

第5 ステップ

ふり返り

第5ステップはふり返りの段階です。放課後子ども教室は、子ども、保護者、地域住民、NPO等の団体が主体となる活動であり、自由な活動の実施を基本としています。ここでいうふり返りとは、当初設定したねらいの達成程度の確認や、実施した活動結果のまとめや反省を意味しています。ふり返りは、まず子ども自身が活動の達成程度を確認したり、理解できなかった点や困ったことなどを考える機会です。またふり返りは、実施したプログラムを踏まえて、次なる放課後子ども教室のプログラムに生かすことをねらいとして実施されるものです。

ふり返りをあまり難しく考えるのではなく、まずはじめは子どもの感想・意見の聞き取りや、あるいは指導・助言に携わった地域の方々の感想・意見、学校関係者の感想・意見・要望などを聞き取ることを中心に実施しましょう。

子どもや保護者、講師等への聞き取り以外の方法としては、添付資料に示すようなふり返りのための調査票を参考にして、子どもを対象とする簡単なアンケートを作成して実施することも良いでしょう。それぞれの活動に合ったふり返りの実施は、必ず次なるプログラム開発に生かせる情報を得ることにつながるでしょう。

■ふり返りを計画・実施する際の留意事項

- (1) ふり返りの実施は、子どもの視点からや、指導・助言者やボランティアの視点から等、情報を得られやすく、かつ活動に直接携わった関係者からの実施をまず検討しましょう。
- (2) ふり返りは、簡単で取り組みやすいものから着手するという発想を大切にして、実施を検討して下さい。
- (3) 活動中や活動終了時に子ども達に感想を問いかけたり、挙手によるアンケートを実施したり、子ども同士で話し合いを行うこともふり返りの取り組みです。
- (4) 簡単に実施可能なふり返りとして、参加した子ども、指導・助言者、ボランティアの方々による反省会を行うことも良いでしょう。話し合いの中から実施した活動を振り返ることによって、今後の改善点や現在の問題点が浮かび上がるでしょう。
- (5) ふり返りを行う場合、とかく成功した結果ばかりを強調しがちなものです。しかし、次なるプログラムの計画や実施に役立つのは、実は成功した事例の話ばかりではなく、失敗したり問題や課題が残された事例の中に有効な情報が多く含まれているものです。
- (6) ふり返りの結果は、プログラムを計画・実施した関係者間で情報を共有すると共に、連絡ノートや報告書として明文化して保存し、次のプログラム開発に携わる関係者に引き継ぎ、役立てることが重要です。
- (7) ふり返りの結果は、保護者にもお便りなどで連絡するなど、その情報提供に努めましょう。ふり返り結果を保護者や関係者に情報提供することは、保護者や関係者の活動への理解を促進し、さらに安心感を付与するなど様々なプラス効果が期待できます。
- (8) 例えば近隣の放課後子ども教室や児童クラブと合同でプログラムを実施するなど大型の行事の場合には、子どもや大人に書かせるタイプのふり返りを行う方法も有効です。

■ふり返りの結果はどのように生かされるのか

ふり返りは、活動に参加した子どものふり返りや、活動支援者（企画者、指導者、ボランティア等）のふり返り、さらには活動に直接携わらない第三者（学校関係者、地域の人、専門家等）によるふり返りなどが考えられます。ここでは子どもによるふり返りや活動支援者のふり返りの結果をその後の活動でどのように生かせば良いのかについて述べます。

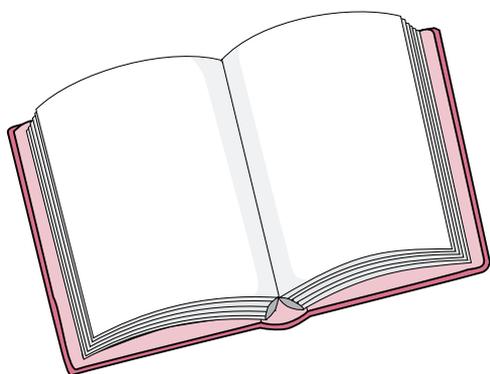
- (1) 活動に参加した子どもによるふり返りの結果、子どもの満足度や、子どもの得た知識・技能の程度、指導・助言者の指導方法についての子どもの意見や感想、さらには子どもが今後取り組みたい事項など様々な情報が得られます。それらの情報は、子どもの取り組む次なるプログラム開発の様々な面の改善に結びつけられます。例えば、主に以下のような事項に活用されます。
 - (a) 活動内容、活動方法、活動場所、活動時間帯など、次なるプログラムの基本的事項の再検討に役立てられる。
 - (b) 子どもの知識・技能の習得程度に応じて、次なるプログラム内容のレベルや活動量の適切性の検討に役立てられる。
 - (c) 指導者・助言者の指導方法のあり方やその改善に役立てられる。
 - (d) 指導者・助言者の人数や指導・助言の頻度の検討に役立てられる。
 - (e) 子どもの満足度や、得られた知識・技能の程度に関する情報を活動支援者にフィードバックすることにより、その後の活動においてよりきめ細かい個に応じた指導・助言が可能になる。
- (2) 活動支援者（企画者、指導・助言者、ボランティア等）のふり返りの結果は、主に以下のような事項に活用されます。
 - (a) 活動支援者間で、実施したプログラムに関する各種情報が共有される。
 - (b) 指導・助言上の問題点や課題が浮かび上がる。
 - (c) 次なるプログラムの活動内容、活動方法、活動場所、活動時間帯など企画に必要となる基本的事項の再検討に役立てられる。
- (3) 上記の子どものふり返りや、活動支援者のふり返り結果を含めて、開発したプログラムを「プログラムバンク」として保存することもぜひ、取り組んで欲しい実践です。その取り組みにより、ふり返り結果を含むプログラム実践例が蓄積され、結果的に豊富なプログラムメニューが完成するでしょう。それらの蓄積は、その後の放課後子ども教室のプログラム開発の参考となるでしょう。

コラム5

Q 活動を指導して頂いた講師の方々にふり返しをお願いするため、質問紙調査を検討しています。その場合、活用できる典型的な問い（設問）の例を教えてください

A 指導者をお願いする設問は数多くありますが、以下のような設問はその典型的なものです。

1. 子どもは活動内容に興味・関心を示しましたか
2. 子どもの活動支援上に何か問題が生じたか（活動時間帯、活動場所等）
3. 子どもの活動支援上、問題が生じた場合その内容は何ですか
4. あなた（講師）は子どもの理解を促進するために何か工夫を行いましたか
5. 子どもの理解の促進を図る工夫をした場合、その内容を教えてください。
6. あなた（講師）は子どもと良くコミュニケーションをとりましたか（話し合いや意見交換を行いましたか）
7. 子どもの活動は予定された時間内に、予定された学習内容を適切に消化できましたか



第Ⅱ部 プログラム事例編



- 1 計画の種類と関連について
- 2 年間活動計画例
- 3 月間活動計画例
- 4 週間活動計画例
- 5 個別プログラム例

1

計画の種類と相互の関連について

実際のプログラム開発にあたっては、個別のプログラムの検討を行うにあたり、その前段として年間計画、月間計画、週間計画等を作成することが望まれます。

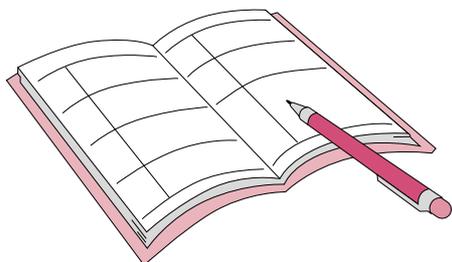
年間計画は文字通り1年間の主な放課後子ども教室の活動内容を明記する計画であり、月間計画は月別の活動内容を年間計画よりも詳細に明記する計画であり、さらに週間計画は1週間の活動内容やタイムスケジュールなどを示す計画です。

年間計画、月間計画、週間計画は、個別のプログラム同様に一定のフォーマット（形式）がある訳ではありません。従って、それぞれの地域や施設の特性を生かした自由な形式で作成することが可能です。

なお、年間計画、月間計画、週間計画は必ず作成しなくてはならないといった強制的なものではありません。しかしそうした計画を作成することにより、場当たりのではなく、年間、月間、週間を通じてバランスのとれた活動プログラムが実施されます。さらにその作成によって、次のような効果が期待されます。

- (1) 年間・月間・週間の活動計画の内容や方法に偏りがいないかを確認できる。
- (2) 季節毎に取り上げるべき活動として欠けているものはないかを確認できる。
- (3) 内容がマンネリ化した計画になっていないかを確認できる。
- (4) 地域住民や保護者、ボランティア等の活動への参加計画が確認できる。
- (5) 他の施設や機関等と連携・協力する活動計画の状況が確認できる。
- (6) 年間・月間・週間計画の作成は、現在の活動ばかりではなく、先の活動を見越した準備を行うためにも有効となる。

以下では放課後子ども教室の実践例を交えて、年間計画、月間計画、週間計画の例を示します。



2 年間活動計画の例

以下に示す例は、放課後子ども教室の年間計画の一例です。それらの事例を参考にして、各地域や学校の特性を活かした年間計画を作成して下さい。

年間計画の例1は、体験活動と学習活動を月別に示し、あわせて月別のテーマ・目標を明示したものです。低学年・中学年・高学年別課題も分けて明示しています。

〇〇〇〇年度放課後子ども教室の年間活動計画の例1

月	主な体験活動の内容	主な学習活動の内容	今月のテーマ・目標
4月	開所式、 手作りお菓子でお茶会、 竹とんぼを作ろう 自然観察：桜を楽しもう	●前学年の復習をしよう 1年生：ドリルにチャレンジ！ 2年生以上：前学年の算数の復習、漢字ドリルの練習	〇〇教室の始まりだ！ 一緒に遊ぼう♪
5月	ジャンボ鯉のぼりをつくろう みんなでパンを焼こう 母の日のプレゼント作り 自然観察：バードウォッチング	●大学生と一緒に楽しく学ぼう！ 低学年：算数・国語ドリル 中学年：算数・国語ドリル 高学年：算数・国語ドリル	新緑の季節！ ・国語・算数ドリルをがんばろう。 ・母の日のプレゼントを作ろう！
6月	野菜を育てよう（サツマイモ・ジャガイモを植えよう） 手芸教室（公民館講座と連携） 室内ゲーム（雨の日の遊び） 父の日のプレゼント作り	●目指せ、算数100点！ 低学年：100マス計算 中学年：かけ算・割り算の完全マスター 高学年：文章問題の克服	・算数テストを皆で100点をとろう！ ・雨二モ負けず・・・楽しく遊ぼう。野菜を育てよう！
7月	マンドリンを体験（大学生クラブとの連携・協力） 手作り石けん（保護者協力） 川で釣り体験（地域住民協力） 七夕飾りの制作	●読書に親しむ月間 低学年：物語をたくさん読もう 中学年：図鑑を調べよう 高学年：伝記をたくさん読もう	・たくさん本を読もう♪ ・地域の方々と交流しよう
8月	落語を聞こう（大学生落研との連携・協力） 料理教室：カレーを作ろう（保護者との協力） 水鉄砲を作ろう、 自然観察：昆虫採集、標本づくり、図鑑づくり	●理科博士になろう 低学年：昆虫採集 中学年：昆虫の標本づくり 高学年：校内の昆虫・自然図鑑づくり	夏休みだ！ ・普段は取り組めない学習活動にチャレンジ！ ・理科の観察、実験、で自由研究も完成させよう♪

月	主な体験活動の内容	主な学習活動の内容	今月のテーマ・目標
9月	囲碁・将棋で遊ぼう（敬老クラブとの協力） 茶道体験（公民館講座の協力） 自然観察：星空観察会 月見団子づくり：保護者との協力	●大学生と一緒に楽しく学ぼう！ 低学年：算数・国語ドリル 中学年：算数・国語ドリル 高学年：算数・国語ドリル	・大学生のお兄さんお姉さんと国語・算数ドリルをがんばろう！ ・秋の自然と文化を満喫しよう
10月	秋空に紙飛行機を飛ばそう 写生に出かけよう 果物を使ったスイーツ作り 自然観察：キノコの種類がわかるようになるよう	●体力づくり重視月間 低学年：鉄棒にチャレンジ 中学年：短距離を早く走る 高学年：跳び箱を克服	・体力づくりに取り組もう♪ ・秋のスイーツづくり、キノコ名人になろう
11月	子ども教室の芋掘り大会！ スイートポテトを作ろう 段ボールで遊ぼう 自然観察：木の実を集めよう、木の実のオブジェ作り	●読書・読解力強化月間 低学年：宮沢賢治を読もう 中学年：夏目漱石を読もう 高学年：芥川龍之介を読もう	読書の秋です。 ・読解力の向上をめざそう ・芋掘り大会をがんばろう
12月	ジャンボ縄跳びに皆で挑戦！ クリスマスケーキづくり 子ども教室のハッピー♪クリスマス	●歴史を学ぶ・調べる月間 低学年：地域の歴史調べ 中学年：日本歴史上の人物 高学年：諸外国の歴史調べ	・歴史にくわしくなろう！ ・クリスマスやお正月の準備をしよう♪
1月	百人一首を覚えて大会だ！ 凧づくり ニュースポーツに挑戦（スポーツチャンバラ） 料理教室：燻製を作ろう	●読書・読解力強化月間 低学年：宮沢賢治を読もう 中学年：夏目漱石を読もう 高学年：芥川龍之介を読もう	・日本の近代文学に親しもう ・寒さに負けず・ニュースポーツに挑戦
2月	子ども教室の豆まき 手芸教室（編み物に挑戦） 親子スケート教室 読み聞かせ、紙芝居	●古典に親しむ月間 低学年：万葉集を読もう 中学年：論語を読もう 高学年：枕草子を読もう	・古典を学ぼう！ ・目指せ！フィギュアスケート選手
3月	大正琴コンサート（敬老クラブとの共催） 生花教室（公民館講座の協力） 自然観察：春を探してピクニック、お別れ会	●大学生と一緒に楽しく学ぼう！ 低学年：算数・国語ドリル 中学年：算数・国語ドリル 高学年：算数・国語ドリル	・大学生のお兄さんお姉さんと一緒に楽しく勉強しよう！ ・春を探して探検しよう

年間計画の例2は、月別に体験活動の内容と、交流活動の内容を示したものです。交流活動は、地域のお年寄り、公民館の受講者の皆さん、大学生や高校生、地域の他の学校のお友達など、多様な交流の対象を取り上げる工夫がなされています。

〇〇〇〇年度放課後子ども教室の年間活動計画の例2

月	主な体験活動・交流活動の内容
4月	<ul style="list-style-type: none"> ●体験活動の内容 <ul style="list-style-type: none"> ・開所式、・お菓子づくり、・自然観察会 ●地域のお年寄りとの交流活動 <ul style="list-style-type: none"> ・大正琴を地域のお年寄りのクラブの皆さんから学ぼう ・昔のベーゴマはどうやって遊ぶの？
5月	<ul style="list-style-type: none"> ●体験活動の内容 <ul style="list-style-type: none"> ・紙飛行機を作って遊ぼう、・お料理教室、・母の日のプレゼント作り ・自然観察：バードウォッチング ●他の小学校の放課後活動のお友達との交流活動 <ul style="list-style-type: none"> ・地域ドッジボール大会、・地域ミニバスケット大会
6月	<ul style="list-style-type: none"> ●体験活動の内容 <ul style="list-style-type: none"> ・茶道の体験、・室内ゲーム（雨の日の遊び）、・父の日のプレゼント作り ●地域の公民館の受講者の皆さんとの交流 <ul style="list-style-type: none"> ・公民館のコーラスクラブの皆さんと合唱しよう ・野菜を育てよう（サツマイモ・ジャガイモを植えよう）
7月	<ul style="list-style-type: none"> ●体験活動の内容 <ul style="list-style-type: none"> ・紙鉄砲で遊ぼう、・おやつを作ろう、・竹馬づくり ●地域の高校生や大学生との交流 <ul style="list-style-type: none"> ・大学生からギターを学ぼう ・大学生や高校生のお兄さん・お姉さんから算数を学ぼう ・大学生や高校生と七夕飾りを作ろう
8月	<ul style="list-style-type: none"> ●体験活動の内容 <ul style="list-style-type: none"> ・近くの川で昔ながら釣り体験、・水鉄砲を作ろう、・手芸教室：ビーズの首飾り ●地域のお年寄りとの交流 <ul style="list-style-type: none"> ・囲碁・将棋をおじいちゃんから学ぼう ・地域の方から盆踊りを学ぼう
9月	<ul style="list-style-type: none"> ●体験活動の内容 <ul style="list-style-type: none"> ・お茶会、・お月見のお団子作り、・竹ぼっくりで遊ぼう ●地域の高校生や大学生との交流 <ul style="list-style-type: none"> ・大学生や高校生とオセロ・トランプ大会 ・大学生や高校生とエコクラフト

月	主な体験活動・交流活動の内容
10月	<ul style="list-style-type: none"> ●体験活動の内容 <ul style="list-style-type: none"> ・紙ヒコーキづくり、・布で造形、スケッチに出かけよう ●地域の大人との交流 <ul style="list-style-type: none"> ・地域の大人と陶芸にチャレンジ ・地域の大人からヨガを学ぼう
11月	<ul style="list-style-type: none"> ●体験活動の内容 <ul style="list-style-type: none"> ・発明家になるワークショップ、・お菓子づくり、・落ち葉とどんぐりでクラフト ●地域の公民館の受講者の皆さんとの交流 <ul style="list-style-type: none"> ・体操クラブの皆さんと体を動かそう ・絵手紙づくり
12月	<ul style="list-style-type: none"> ●体験活動の内容 <ul style="list-style-type: none"> ・餅つき大会、・クリスマス会、・凧づくり、・年賀状づくり ●他の小学校の放課後活動のお友達との交流活動 <ul style="list-style-type: none"> ・地域ドッジボール大会、・地域縄跳び大会
1月	<ul style="list-style-type: none"> ●体験活動の内容 <ul style="list-style-type: none"> ・凧揚げ、・百人一首、・かるた大会、・生け花教室、・手芸教室：編み物、 ●地域の大人との交流 <ul style="list-style-type: none"> ・ぐるぐるパンづくり、・七草粥を作ろう ・パソコンを一緒に学ぼう
2月	<ul style="list-style-type: none"> ●体験活動の内容 <ul style="list-style-type: none"> ・豆まき、・お手玉教室、・おやつ作り ●地域の高校生や大学生との交流 <ul style="list-style-type: none"> ・大学生や高校生のお兄さん・お姉さんから算数を学ぼう ・大学生と一緒に科学教室：スライムを作ろう
3月	<ul style="list-style-type: none"> ●体験活動の内容 <ul style="list-style-type: none"> ・将棋教室、・生け花教室、・ひな祭りのお菓子づくり、・お別れ会 ●地域のお年寄りとの交流 <ul style="list-style-type: none"> ・囲碁・将棋大会 ・地域のお年寄りから地域の昔話を聞こう

3

「放課後子ども教室」月間活動計画の例

月間活動計画は年間活動計画をより詳細にし、月別の活動内容を示したものです。以下の月間活動計画の例1は、月別・曜日別に主な活動内容を示す事例です。

「放課後子ども教室」月間活動計画の例1

【4月の月間目標・ねらい】 ○○○教室の始まりだ！一緒に遊ぼう♪ 曜日別のテーマを決めてみんなで一生懸命取り組もう

日	月	火	水	木	金	土
	テーマ					
	学 習	体 験	学 習	体 験	運動・音楽	交 流
	1 開所式	2 新入生歓迎会	3 学習会	4 紙細工	5 野球 サッカー	6 お父さんと パソコン教室 ☆桜祭り
7	8 学習会	9 自然観察 ：桜を楽しむ	10 学習会	11 歴史散歩	12 新しい楽器を 演奏しよう	13 親子で 科学館訪問
14	15 学習会	16 手作菓子	17 学習会	18 竹とんぼ作り	19 野球 サッカー ♪授業参観	20 親子で 料理教室
21	22 学習会 ♪5・6年生 校外学習	23 自然観察： 昆虫採集	24 学習会 ♪1・2年生 遠足	25 茶道体験	26 映画鑑賞 ♪3・4年生 校外学習	27 地域の大人と 川釣り体験 ☆地区の釣り 大会と共催
28	29 ☆○○地区 春の運動会	30 魚の三枚 おろし				

注：カレンダー内の♪印は学校行事、☆印は地域の行事・祭りを意味している。

「放課後子ども教室」月間活動計画の例2は、青森県鶴田町「サンシャインスクール」の事例です。月間計画には体験活動が行われる地域の学校名等の場所、時間帯、料理教室の内容が明示されています。さらにこの事例では、月別の体験内容と共に、体験活動への子どもの参加申し込みをあわせて明示しています。

「放課後子ども教室」月間活動計画の例2

平成22年6月1日発行 鶴田町放課後子どもプラン運営委員会

サンシャインスクールつるた

6月号
児童クラブ・子ども教室

6月の行事予定

日	曜日	内容
1	火	フリー
2	水	フリー
3	木	フリー
4	金	フリー
5	土	お手伝い券作り
6	日	休館日
7	月	フリー
8	火	フリー
9	水	フリー
10	木	フリー
11	金	フリー
12	土	フリー
13	日	休館日
14	月	フリー
15	火	フリー
16	水	フリー
17	木	フリー
18	金	フリー
19	土	ブラバン
20	日	休館日
21	月	フリー
22	火	フリー
23	水	フリー
24	木	フリー
25	金	フリー
26	土	サンドイッチ作り
27	日	休館日
28	月	7月分集金日
29	火	フリー
30	水	フリー

日増しに暑かくなり、緑の色も濃くなりました。これから雨の多いじめじめした日が続きます。子どもたちの体調に気くばりしながら楽しく過ごしたいと思います。

6月体験教室

5日・・・お手伝い券作り 10:30～12:00
※切5月28日
※お家の人にあげるお手伝い券を作ります。

19日・・・ブラバン 10:30～12:00
※プラスチックの瓶に絵を書いてキーホルダーを作ります。
※切8月11日

26日・・・サンドイッチ作り 10:30～12:00
※切8月18日
※サンドイッチ用のパン2枚使って作ります。
足りない人はお弁当を持ってきてください。
(持ち物)お皿、飲み物、おしぼり

体験は当日のみで、必ず申し込みが必要です。
※切厳守!

お知らせ

7月分の集金日・・・6月26日です。
お昼替えのお願い・・・汗のかきやすい子は
着替え・汗ふきタオルの準備をお願いします。

コップの準備・・・6月からサンシャイン
スクールで水分補給の為、麦茶を煎置します。プラスチックの
コップを5月中に持たせてください。必ずコップの底に名前を
つけて下さい。

フリーとは読経遊び(唱歌、読書、お絵かき、トランプ、オセロ、ブロック、DVD鑑賞など)です。

きりとり

お手伝い券作り	ブラバン	サンドイッチ作り
全 名前	全 名前	全 名前

4 週間活動計画の例

週間計画は、月間計画をさらに詳細にした計画です。活動内容ばかりでなく講師名や活動に必要な用具などの教材・教具、さらにはタイムスケジュール等も含めて明示される場合があります。週間活動計画の例1は、子どもが一齐に同じ活動に取り組む事例であり、時間帯別に活動内容が示されています。例2は、同じ時間帯に複数のメニューが展開するものであり、子どもは各メニューの中から自分の希望に添った活動に参加する週間計画の例です。

「放課後子ども教室」の週間活動計画の例1（時間帯別に活動が明示される例）

	月	火	水	木	金	土
午前						学習会
午後 2時～	学習1年 フリータイム	フリータイム	学習1年 フリータイム	学習2年 フリータイム	学習2年 フリータイム	体験教室 ：親子
3時～	学習3年 学習会	学習会	学習3年 学習会	学習会	学習4年 学習会	学習会
4時～	学習4年	体験教室	学習5年 学習6年	体験教室	学習5年 学習6年	体験教室
5時～ 6時	フリータイム	フリータイム	フリータイム	フリータイム	フリータイム	フリータイム

注：・ 体験教室は1年～6年生が参加可能。体験教室は火曜・木曜・土曜に実施。

- ・ 学習〇年は、当該時間に各学年別クラスで算数・国語の特別指導あり（学生ボランティアや地域の大人等の指導）を意味する。各学年共に週に2時間は特別指導あり。
- ・ 学習会は、宿題や教科の予習・復習の自学自習を行う時間。
- ・ 毎日1時間以上は必ず学習会の時間を確保している。
- ・ フリータイムは、自由遊びの時間を意味する。

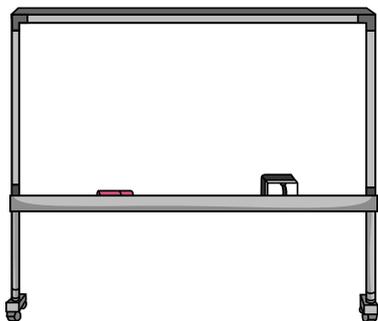
● 「放課後子ども教室」の週間活動計画の例2(複数メニューが同時に展開する例) ●

	月	火	水	木	金	土
午前						学習会
正午～ 午後2時 未満	フリータイム	フリータイム	フリータイム	フリータイム	フリータイム	体験教室 ：親子
午後3時 ～5時 未満	スポーツ教室 手芸教室 学習教室	スポーツ教室 工作教室 体験教室 学習教室	スポーツ教室 茶道教室 学習教室	スポーツ教室 体験教室 学習教室	スポーツ教室 科学教室 絵画教室 学習教室	スポーツ教室 空手教室 学習教室
5時以降 ～6時	フリータイム	フリータイム	フリータイム	フリータイム	フリータイム	フリータイム

注：・ 上記の例は、午後3時～5時までの時間帯で複数の体験・学習メニューを展開する事例である。

子どもは、各メニューの中から体験したい内容を選択する。

- ・ **体験教室** は、活動支援者・ボランティアの企画講座を意味する。
- ・ 「～教室」は外部講師を招いて行われる体験・スポーツ・学習教室である。



「放課後子ども教室」の体験活動プログラムの内容例

「放課後子ども教室」の体験活動のプログラムには、自然体験、スポーツ活動、伝統的文化継承活動、食・料理体験活動、美術・音楽等芸術的体験活動、異年齢や世代間の交流活動など様々な体験活動の内容があります。以下では、その主な内容例を示します。

●自然体験・環境学習関係のプログラム例

◆◆自然観察・自然とふれあうプログラム◆◆

植樹・森林学習、山菜採集、ハイキング、花・花粉の観察、樹液の採集、木登り

◆◆自然の中で遊ぶプログラム◆◆

海遊び、川遊び（ボート・カヌー体験、釣り体験、いかだ作り、いかだ下り）、雪遊び、かまくら作り

◆◆自然の生き物とふれあうプログラム◆◆

昆虫採集、生物の生態観察、野鳥観察、虫鑑賞

◆◆自然の中で長時間遊ぶ、植物栽培、農作業体験のプログラム◆◆

キャンプ、星空観察、植物栽培、農業体験、いちご作り、芋掘り

●教科に関する学習関係のプログラム例

◆◆国語・英語・その他語学関連のプログラム◆◆

枕草子を読もう、シェークスピアを原語で読もう、フランス語講座
5・7・5のリズムを日常生活の中に探そう、漢字の成り立ちと意味

◆◆算数関連のプログラム◆◆

平均気温の上昇を関数式で表わそう、日常の中の統計
暗算競争大会、そろばんを楽しく、自然現象と確率

◆◆理科・科学関連のプログラム◆◆

空気の不思議・空気砲、炎はどうなっているのか、雲の種類と構造、
ドライアイスは何から作られているのか、キノコの種類、花のつくり
ミツバチの観察と蜂蜜の不思議

◆◆社会科関連のプログラム◆◆

地域の工場を訪ねよう、地域の会社の社長さんの話を聞こう
学区の安心・安全マップづくり、地域の遺跡を調べよう
地域にある石碑の意味を調べよう

●スポーツ活動のプログラム例

◆◆屋外のスポーツのプログラム◆◆

野球、サッカー、ドッジボール、キックベース、縄跳び、水泳、テニス、スキー、登山、ゲートボール、陸上競技など

◆◆屋内のスポーツのプログラム◆◆

バスケットボール、バドミントン、バレーボール、卓球、体操、ダンス、ニュースポーツ（スポーツチャンバラ、ソフトバレー、グランドゴルフ）、縄跳び、跳び箱、各種屋内ゲーム、剣道、柔道、空手、すもう

●伝統的文化継承や異文化理解のプログラム例

◆◆日本の伝統文化のプログラム◆◆

茶道、華道、書道、和太鼓、三味線、長唄、民謡・童謡、詩吟、日舞、琴
陶芸活動、郷土舞踊、紙すき体験、染め物体験、人形浄瑠璃、歌舞伎

◆◆異文化理解のプログラム◆◆

西洋料理のマナー講座、ソーシャルダンス、海外の民族衣装を比べよう

●食・料理体験活動のプログラム例

◆◆日本の料理をつくるプログラム◆◆

おせち作り、桜餅作り、手巻き寿司、ちらし寿司、いなり寿司、うどん・そばを打つ、山菜で天ぷら

◆◆海外の料理をつくるプログラム◆◆

タイカレー作り、中華ちまき、シュウマイ作り、ソーセージ作り

●美術・音楽等芸術的体験活動のプログラム例

◆◆美術体験のプログラム◆◆

油絵を描こう、彫刻づくり、日本画体験、墨絵体験、

◆◆音楽鑑賞・音楽体験のプログラム◆◆

ピアノ、ギター、バイオリン、チェロ、和楽器（琴、三味線、太鼓）、合唱

●異年齢・世代間の交流に関するプログラム例

◆◆異年齢の交流に関するプログラム◆◆

小学生と中学生の交流会、中学生から小学生へのお手紙交流、他の学校のお友達との合同発表会、他の学校のお友達との球技大会

◆◆世代間の交流に関するプログラム◆◆

地域の方と一緒にバーベキュー大会、世代間の意見交換、昔の道具やおもちゃづくり、地域のお年寄りから伝統的行事を学ぶ、介護・福祉施設入所者との交流

●昔遊び・自由遊びのプログラム例

◆◆集団での遊び◆◆

かごめかごめ、おしくらまんじゅう、ゴム跳び、缶蹴り鬼、かくれんぼ、鬼ごっこ、椅子取りゲーム、ハンカチ落とし、馬跳び、フルーツバスケットなど

◆◆小人数での遊び◆◆

じゃんけん遊び、凧揚げ、コマ回し、おはじき、ビー玉、お手玉、笹船づくり、紙風船づくり、手遊び歌・数え歌遊び、虫取り、にらめっこ、たんぽぽの水車

●その他のプログラム例

◆◆季節の行事を取り上げるプログラム◆◆

七夕、クリスマス会、母の日・父の日のプレゼント作り、カルタ大会

◆◆情報化や国際化への対応を意識したプログラム◆◆

パソコン教室、英会話等語学教室、インターネットの活用法

◆◆児童の安心・安全対策を重視したプログラム◆◆

交通安全教室、防犯教室、不審者を見分ける方法

◆◆ボランティア活動を目的としたプログラム◆◆

地域清掃ボランティア、手話教室

第Ⅲ部 個別プログラム例



- 1 自然体験・環境学習関連のプログラム例
- 2 教科に関する学習関連のプログラム例
- 3 伝統文化継承のプログラム例
- 4 異文化理解のプログラム例
- 5 食・料理体験プログラム例
- 6 異年齢・世代間の交流に関するプログラム例

自然体験・環境学習関連のプログラム例： **森をつくる木々たちを知ろう**

プログラムのねらい	○ 植物の高さの違いによって、森が作られることを学ぶ
プログラムの目標	○ 森や林には、様々な高さの樹木があって、森を構成していることを知り、それぞれの木々が生きるための工夫を知る ○ 樹木の階層構造とは何かを理解する
対象者	小学校高学年・中学生
実施時期	4月～11月（最も適した時期は、6月～9月）
所要時間	1時間程度（往復の距離は約3km～5km程度）
準備する教材	植物図鑑、鉛筆、画用紙、ノート等
児童・生徒の持ち物	植物図鑑（ハンディタイプ）
講師の依頼	植物分類学、植物地理学等の専門家、森の案内人等地域の人材

児童・生徒の活動内容	指導・助言者の支援内容と発問例
<p>1. 施設から森に向けてハイキングし、植物を観察する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・森を歩く中で、木の様子の違い、葉の様子、樹皮の様子を観察する ・背の高い木、背の低い木の違いを観察し、発表する <p>2. 樹木の種類が、高木、亜高木、低木、草本になっていることを知る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・木の様子、葉の様子、樹皮をノートに転写する等の活動に取り組む <p>3. 森をつくる木々たちは、その高さによってそれぞれの森を構成していることを知る</p> <p>4. 学校へ戻る</p>	<p>1. 児童・生徒を安全に森に案内する</p> <p>(1) 自分の知っている植物の名前をあげてみよう</p> <p>(2) 植物の高さについて気がついたことを発表しよう</p> <p>2. 高木、亜高木、低木、草本の種類と見分ける高さの違いを説明する</p> <p>(植物の種類)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高木：カラマツ、ミズナラ、シナノキ ・亜高木：ヤマボウシ、アオダモ ・低木：カラスサンショウ、ウツギ ・草本：ミヤコザサ等 <p>(高さの違い)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高木：10～20m ・亜高木：5～10m ・低木：3m以下 ・草本：1m以下 <p>3. 児童・生徒の観察を促し考えさせる</p> <p>(3) それぞれの木々が生きていくためには、どんな工夫をしているのだろう</p> <p>4. 安全に児童生徒を誘導し帰る</p>

注：当プログラムは、那須甲子少年自然の家の自然体験プログラムを参考に作成した。

自然体験・環境学習プログラム例：

地球温暖化抑止に役立つ植物ケナフ（又はユーカリ）を育てよう

プログラムのねらい	○ 5～6ヶ月で4mに成長するケナフを栽培することにより、1年草の植物観察を行う。ケナフの栽培を通じて環境問題への関心を高める
プログラムの目標	○ アフリカ原産のケナフは、二酸化炭素吸収量が一般植物の約4倍と高い特性があり、またその繊維から紙が生成できるなどの知識を得る。 ○ 栽培によりケナフの特性を体感し、環境問題への関心を高める
対象者	小学校高学年・中学生
実施時期	4月～11月頃
所要時間	7～8ヶ月
準備する教材	ケナフの種、ジョウロ、支柱、鎌などの栽培用具、校庭の花壇
児童・生徒の持ち物	特になし
講師の依頼	特に必要ない。しかし、植物学等の専門家や環境問題に詳しいNPO等の人材を途中講師として招き、話を聞く機会が作ればより望ましい

児童・生徒の活動内容	指導・助言者の支援内容
1. 4月頃（気温が20度以上になったら） <ul style="list-style-type: none"> ケナフの種を蒔く。直蒔きでも発芽させてから蒔いても良い 指導者の説明によって、ケナフの特性を児童・生徒は理解する 	1. ケナフという植物の特徴を説明する <ul style="list-style-type: none"> (1) アフリカ現在で赤道に近いアジア地域や中南米で栽培される。アオイ科ハイビスカス属の1年草で、春に蒔くと夏に3～5mに成長し、ハイビスカスに似た花が咲く (2) ケナフは二酸化炭素の吸収量が通常の植物に比べて4倍であり、環境保護に役立つ植物であること (3) ケナフの繊維を活用すれば、紙を作ることが出来るなど環境にやさしい植物の特性を説明する
2. 6月頃：20cmくらい伸びてきたら間引きする。水やり、雑草取りも行う	2. 草取り、水やりの指導
3. 7月頃：支柱を立てて支えを作る * 折りにふれ成長の様子を観察する	3. 支柱を立てる指導
4. 8月終わり頃：開花が始まる。蕾を沢山付けるので、栄養が行き届くよう摘花を行う。採った花は草木染めの原料とし、草木染めを体験する	4. 摘んだ花を用いて、草木染めを体験させる
5. 11月頃：ケナフの刈り取り、種を取る	5. 刈り取りの指導。刈り取ったケナフは次回、紙作りのために保存

注：当プログラムは、NPO法人キッズエクスペリエンス21『文部科学省委嘱事業 放課後あそぼ！放課後活動プログラム集』、平成20年を参考に作成した。

自然体験・環境学習関連のプログラム編成の視点と手順

体験活動を中心とする学習プログラムはさまざまな内容が考えられます。以下ではいくつかの体験重視のプログラム（個別事業計画）の例を示します。

1. 自然体験・環境学習のプログラムの内容例

体験活動重視のプログラムの例としては、例えば自然体験活動や環境学習のプログラムとしては、「植樹・森林学習」、「山菜採集」「ハイキング」「川遊び（ボート・カヌー体験、釣り体験、いかだ作り、いかだ下り）」「雪遊び」「昆虫採集」「生物の生態観察」「野鳥観察」「キャンプ」「星空観察」「芋掘り」「キノコを知ろう」「木の実を集めてオブジェを作ろう」等、多様な内容のプログラムを計画することが可能です。

なお、自然体験・環境学習のプログラム開発にあたっては、地域の大学や研究所などの専門家のアドバイスを受けることも、プログラムづくりに期待される作業と言えるでしょう。

2. 自然体験・環境学習関係のプログラム作成上の留意点

- (1) 自然体験・環境学習関係のプログラムは、自然や環境について子どもが自ら体験・観察し、かつ考えることを重視する。
- (2) 子どもの自然への関心を高め、身近な自然を大切にすることを養うプログラムを作成するよう心がける。

3. 自然体験・環境学習関係のプログラム作成の流れ

第1ステップ

- (1) 自然体験・環境学習に関する関連資料を収集する
- (2) 自然体験・環境学習の指導が可能な専門家を調査する
- (3) 子どもにどのような自然体験・環境学習がしたいのか希望を調査する

第2ステップ

- (4) 活動のテーマを決定する
- (5) 自然体験・環境学習の子どものねらい（目標）を明確にする

第3ステップ

- (6) 子どもの活動内容と、その活動を展開する（実施する）手順を検討する
- (7) 指導・助言者を確保し、指導・助言者との連絡・調整を行う
- (8) 指導・助言者の指導内容や発問を明確にする
- (9) 必要な教材・教具の準備、体験場所の下見、講師への連絡調整を実施する
- (10) 子どもが体験したことを考え、まとめ、発表する機会をプログラム内やプログラム外にセッティングする

第4ステップ

- (11) 自然体験・環境学習のプログラムを実施する（観察・体験、まとめ・発表を含む）

第5ステップ

- (12) プログラムに参加した子どもの振り返り、指導者・助言者等スタッフの振り返りを実施する
- (13) 次回の事業計画に活かせる方法、残された問題点・課題を明確化する

教科に関する学習関連のプログラム例： **空気砲で遊ぼう**

プログラムのねらい	○ 空気砲を作成した遊びを通して、空気の流れやその威力、さらには空気砲の原理の理解の促進を図る
プログラムの目標	○ 空気砲を活用して空気の流れや空気の威力を理解する ○ 空気についての興味・関心を高める
対象者	小学生
実施時期	特になし
所要時間	2時間程度
準備する教材	段ボール箱（30cm×23cm×20cm程度）、ガムテープ、カッター、マッチ、線香など煙の出るもの、ローソク（10cm長さ10本程度）、ぞうきん、バケツ
児童・生徒の持ち物	特になし
講師の依頼	空気砲の指導が可能な地域の大人や専門家（理科担当教員等）

児童・生徒の活動内容	指導・助言者の支援内容
<ol style="list-style-type: none"> 空気砲をつくる <ul style="list-style-type: none"> 空気を漏らさないようにガムテープでしっかりとめる カッターで穴をつくる 空気砲の中に線香などによって煙を穴から入れる 空気砲をたたき、煙が輪になって穴から吹き出す現象や、ローソクの火を消す現象を観察する 空気砲の原理を理解する 空気の流れや威力を自分でやって体感し、話し合い、感想等を発表し合う 	<ol style="list-style-type: none"> 空気砲を段ボール箱でつくることを指導する マッチのつけ方の指導、線香の扱い方の指導を行う 空気砲によるローソクの火消しや線香の煙を活用した空気砲の輪づくりの指導を行う 空気砲の原理について説明する。 空気砲の空気は、空気の輪が回転しながら飛ぶ。それによって、うちわで扇いだりする空気の流れと違い、周りの空気との「まさつ」が小さくなる。よって空気抵抗（まさつ）の小さくなった空気の輪は普通の空気よりも勢いよく遠くまで飛ぶことを説明する 児童間の話し合いをまとめる

教科に関する学習関連のプログラム編成の視点と手順

1. 教科に関する学習関連のプログラムの内容例

教科に関する学習関連のプログラムは、国語、算数、理科、社会、英語等、様々な内容が考えられます。教科に関する学習プログラムでは、授業の補完としてドリル学習等を行うことも可能ですが、授業では体験できない実験、観察、栽培や子どもによる見学、話し合いなど多様な体験的学習方法を活用することも期待されます。

また、学校の正規授業では取り上げにくい長編の文学作品を取り上げて、子どもでそれを継続して読むことや、地域の石碑を全て調べるといったような長期にわたるプログラムを計画・実施することも望ましいと考えられます。

2. 教科に関するプログラム作成上の留意点

- (1) 教科に関するプログラムは、正規授業の補完としての学習と共に、正規授業のさらなる発展としての学習機会の提供を目指すことを重視する。
- (2) 教科に関するプログラムは、正規授業では取り上げにくい実験・実習や、長期にわたる学習内容を取り上げ、子どもの学習への興味・関心を高めることをねらいとするよう努めるものとする。

3. 教科に関するプログラム作成の流れ

第1ステップ

- (1) 教科に関するプログラムを実施するための関連資料、教材を収集する
- (2) 教科に関するプログラムを指導可能な指導・助言者を調べる

第2ステップ

- (3) 教科に関するプログラムの具体的なテーマを決定する
- (4) 教科に関するプログラムの子どものねらい（目標）を明確にする

第3ステップ

- (5) 教科に関するプログラムの活動を展開する手順を検討する
- (6) 指導・助言者の指導内容を明確化にする
- (7) 必要な教材・教具の準備、体験場所の下見を行う
- (8) 指導・助言者を確保し、連絡・調整を実施する

第4ステップ

- (9) 教科に関するプログラムを実施する（観察・鑑賞・体験、まとめ・発表を含む）

第5ステップ

- (10) プログラムに参加した子どもの振り返り、指導者・助言者等スタッフの振り返りを実施する
- (11) 次回プログラムの計画に活かせる点、残された問題点・課題を明確化する

伝統文化継承のプログラム例： 日本舞踊の所作を体験しよう

プログラムのねらい	○ 日本舞踊の所作を体験し、日本の伝統的文化の理解を図る
プログラムの目標	○ 日本舞踊には、男踊り、女踊りがあることを知る ○ 日本舞踊の歩き方、扇の使い方とその意味を理解する ○ 日本舞踊専門家の舞いを鑑賞し、舞いと唄の関連や意味を理解する
対象者	小学生・中学生
実施時期	年間を通じて可能
所要時間	約1時間
準備する教材	舞扇、日本舞踊のビデオテープ、ノート等
児童・生徒の持ち物	可能であれば、足袋
講師の依頼	日本舞踊の指導者・専門家

児童・生徒の活動内容	指導・助言者の支援内容と発問
1. 日本舞踊における挨拶の仕方を学ぶ	1. 日本の伝統的文化における礼儀を指導する (1) お茶や踊りの師匠に対する挨拶にはどのような意味があるか考えてみよう
2. 日本舞踊における男踊り、女踊りの典型的な舞の一部を鑑賞する	2. 典型的な男の舞と、女の舞を見せる (2) 男の舞と、女の舞はどこが違うか考えて、気づいたことを発表しよう
3. 男踊り、女踊りの体験、泣きの振りの体験	3. 基本的振りを指導する お辞儀の振り、泣き・笑いの振り、歩き方の振り、雨をよける振り等の基本的日本舞踊の所作を指導する。
4. 日本舞踊家のプロの「藤娘」の舞踊をビデオ鑑賞する	4. 「藤娘」の解説を行う (3) 藤娘のどこが良かったか発表しよう
5. ビデオ鑑賞の感想を話し合う	5. 児童・生徒間で話し合いをする

異文化理解のプログラム例： **西洋料理のテーブルマナーの基本を学ぼう**

プログラムのねらい	○ 西洋料理のテーブルセッティングやテーブルマナーの基本的知識を得る。 実際にスープを飲み、テーブルマナーの理解を図る
プログラムの目標	○ 西洋料理の基本的テーブルマナーの知識を得る（ナイフとフォーク、グラス等食器の配置、種類とその使い方を知る） ○ スープ（その他の前菜や主菜）の食べ方を体験する ○ 日本料理のマナーと西洋料理のマナーの違いを比較し、理解する
対象者	小学生・中学生
実施時期	年間を通じて可能
所要時間	約2時間弱
準備する教材	西洋料理のテーブルセッティング一式（ナフキン、コップ、ナイフ、フォーク、皿等）、スープ皿・スプーン、スープ（可能であればその他の前菜や主菜）人数分
児童・生徒の持ち物	特になし
講師の依頼	西洋料理のテーブルセッティングやテーブルマナーの基本知識を指導可能な者（例えばホテル関係者等）

児童・生徒の活動内容	指導・助言者の支援内容
1. 西洋料理のテーブルセッティングの基本を理解する。西洋料理のテーブルマナーの基本的知識を得る	1. フォーク、ナイフ、スプーンの配置や、食器の種類、食事の構成等の基本的なテーブルセッティングの知識を実物の食器を用いて説明する
2. スープ（その他の前菜や主菜）の食べ方の基本マナーを知る	2. 人数分のスープ（可能であればその他の前菜や主菜）を準備し、スープの飲み方（前菜や主菜の食べ方）の基本マナーを指導する
3. スープ（その他の前菜や主菜）を基本マナーに従って食する	3. スープ（その他の前菜や主菜）を児童と共に食する
4. 日本料理の基本マナーを知る。日本料理の基本マナーと西洋料理の基本マナーの違いを理解する	4. 日本料理の基本マナーと西洋料理のマナーを比較し、違いを説明する
5. 後片付けをする	5. 後片付けの指導を行う

伝統的文化継承や異文化理解のプログラム編成の視点と手順

1. 伝統的文化継承・異文化理解プログラムの内容例

伝統的文化継承や異文化理解のプログラムの例としては、例えば日本の伝統文化継承プログラムとして「茶道教室」「華道教室」「和太鼓・三味線体験」「長唄・清元を歌おう」「日舞体験」「紙すき体験」「染め物体験」「人形浄瑠璃・歌舞伎鑑賞会」などがあります。

また、異文化理解プログラム例としては、「西洋料理マナー講座」、「外国語を学ぼう」「タイ料理作り」「ソーシャルダンス体験」「テコンドー体験」「海外の民族衣装を作ってみよう・着てみよう」など、異文化の衣食住体験、料理、スポーツ、言語の学習など多様な内容が考えられます。

2. 伝統的文化継承・異文化理解のプログラム作成上の留意点

- (1) 伝統的文化継承や異文化理解のプログラムは、日本の伝統的文化や諸外国の異文化についての理解を深めることを重視する。
- (2) さらに伝統的文化や異文化に関する諸活動を自ら体験・鑑賞することにより、文化継承の重要性を認識するよう努める。

3. 伝統的文化継承・異文化理解のプログラム作成の流れ

第1 ステップ

- (1) 伝統的文化継承・異文化理解の関連行事や関連資料の情報を収集する
- (2) 伝統的文化継承・異文化理解に関する専門的指導が可能な指導・助言者を調査する

第2 ステップ

- (3) 伝統的文化継承・異文化理解の具体的なテーマを決定する
- (4) 伝統的文化継承・異文化理解の子どものねらい（目標）を明確にする

第3 ステップ

- (5) 伝統的文化継承・異文化理解の活動を展開する手順を検討する
- (6) 指導・助言者の指導内容を明確にする
- (7) 必要な教材・教具の準備、体験場所の下見を行う
- (8) 指導・助言者を確保し、連絡・調整を実施する

第4 ステップ

- (9) 伝統的文化継承・異文化理解のプログラムを実施する（観察・鑑賞・体験、まとめ・発表を含む）

第5 ステップ

- (10) プログラムに参加した子どものふり返し、指導者・助言者等スタッフのふり返しを実施する
- (11) 次回プログラムの計画に活かせる点、残された問題点・課題を明確化する

食・料理体験プログラム例： おばあちゃんの料理「お煮染め」を作ろう

プログラムのねらい	○ 日本の伝統的家庭料理「お煮染め」を作り、日本の家庭料理づくりの知識を与える。さらに、食材を活かす日本料理の特徴の理解を図る
プログラムの目標	○ 日本の伝統的家庭料理「お煮染め」の作り方を知る ○ お煮染めはどのような機会に食されてきたかを理解する ○ 日本料理の特徴（素材の持ち味を生かす）を理解する
対象者	小学生・中学生
実施時期	年間を通じて可能
所要時間	約2時間
準備する教材	にんじん、椎茸、高野豆腐、こんにゃく、昆布巻き等お煮染めの素材 砂糖、醤油、酒、みりん、だし汁等調味料、ガスコンロ、包丁、ボール
児童・生徒の持ち物	エプロン
講師の依頼	児童・生徒の祖父母など、日本の伝統的家庭料理作りの可能な者

児童・生徒の活動内容	指導・助言者の支援内容
1. お煮染めの素材を一口大に切る	1. 素材によって、異なる切り方、飾り切りなどを包丁の使い方を指導する
2. 出汁を作る ■出汁の取り方（1.2リットル分） ①10cm角の昆布を1リットルの水に一晚（最低3時間）浸けておき、火にかけて空気の泡がブクブク出てきたら沸騰する前に昆布を取り出す ②その鍋を一度沸騰させて火を止め、そこに100ccの水を追加してからカツオ節を1つかみ投入し、さらに水を100cc追加して5分したらキッチンペーパーで濾す。※上記の材料は1人分、4人分はこの4倍量	2. 出汁の作り方を指導する 前日から、出汁の準備に取り組んでいることを説明する
3. 素材別に出汁で煮る。その後味付けをして煮る	3. 素材別に出汁で煮て、さらに味付けのために煮ることを指導する
4. 完成したお煮染めを盛りつける	4. 盛りつけ方の指導を行う
5. お煮染めを皆で食べて、日本の家庭料理を味わう。さらに会食の中で、講師からどのような時にお煮染めを作るか、地域や家庭によってお煮染めに用いる素材が異なることなどをうかがい、講師と質疑応答を行う	5. お煮染めを作る機会や、家によって用いる素材が異なることなどを説明しながら、児童・生徒と共に食事をする

注：お煮染めの作り方は地域により、また個人によって多様である。上記のお煮染めの調理例はあくまでも一つのサンプルである。

食・料理体験のプログラム編成の視点と手順

1. 食・料理体験のプログラムの内容例

食・料理体験のプログラム例としては、例えば「おせち作り」「桜餅作り」「手巻き寿司を作ろう」「うどん・そばを打つ」など日本の伝統的料理を取り上げたり、あるいは「タイカレーを作ろう」「中華ちまき・シューマイ作り」「スイーツを作ろう」「保存食づくり」など異文化理解を兼ねる食体験をプログラム内容として取り上げることも良いでしょう。

2. 食・料理体験プログラム作成上の留意点

- (1) 食・料理体験プログラムは、日本の食文化と海外の食文化への理解を深めることを重視する。
- (2) 自ら料理を作る、食べる体験を通じて、食への関心・意識を高める
- (3) 子どもの、食に関する技術・技能の向上を図るよう努める。

3. 食・料理体験プログラム作成の流れ

第1 ステップ

- (1) 食・料理体験に関する関連資料を収集する
- (2) 食・料理体験について専門的指導の可能な指導者・助言者を調査する

第2 ステップ

- (3) 食・料理体験プログラムの具体的テーマを決定する
- (4) 食・料理体験プログラムの子どものねらい（目標）を明確にする

第3 ステップ

- (5) 食・料理体験プログラムに必要な食材、料器具、料理場所を準備・確保する
- (6) 食・料理体験プログラムの展開の手順を検討する
- (7) 食・料理体験の指導・助言者の指導内容を明確にする
- (8) 料理を行う場所の下見、指導・助言者との連絡調整を実施する

第4 ステップ

- (9) 食・料理体験プログラムを実施する（調理実習、食事、後片付けを含む）

第5 ステップ

- (10) プログラムに参加した子どもの振り返り、指導者・助言者等スタッフの振り返りを実施する
- (11) 次回の事業計画の改善に活かせる点、残された問題点・課題を明確化する

異年齢・世代間の交流に関するプログラム例： **連凧を作って遊ぼう**

プログラムのねらい	○ 児童と地域の大人との世代間交流の一環として、連凧作りにとりくみ、異世代の理解を図る
プログラムの目標	○ 一人一個の凧づくりに取り組み、伝統的遊びの手法を地域の大人から学ぶ。作成した個別の凧をあげて遊ぶ。 ○ 各々の凧をつなげて一つの連凧を作成する。その作業を通じて、多人数で協力することで大きな作品が完成する達成感・連帯感を得る ○ 異世代との交流活動を通じて、相互の理解の促進を図る
対象者	小学生、地域の大人
実施時期	年間を通じて可能
所要時間	1日間
準備する教材	1人あたり：カラービニール袋3枚（30cm×30cm 1枚、しっぽとして2×100cm2枚）、竹ひご2本（太さ2mm×30cmを2本）、凧糸、袋の口をしぼる針金入りのビニール袋、はさみ、セロハンテープ、油性ペン
児童・生徒の持ち物	特になし
講師の依頼	特に必要なし、指導・助言には地域の大人があたる

児童・生徒の活動内容	指導・助言者の支援内容
1. 凧を一人一つ作成する	1. 日本の伝統的遊びの一つとして、子どもの凧づくりを指導する
2. 一人ずつ完成した凧を飛ばして遊ぶ	2. 完成した一つの凧でも十分に飛ばすことを指導する
3. 完成した凧をつなぐ	3. 一つ一つの凧をつなげる指導・助言を行う
4. つないだ凧を広い場所（川原など）で全員で一緒に飛ばして遊ぶ	4. つないだ凧を飛ばす補助、指導を行う
5. 感想や意見交換、自己評価を行う	5. 児童の感想、自己評価を実施する

注：当プログラムは、NPO法人キッズエクスプレス21『文部科学省委嘱事業 放課後あそぼ！ 放課後活動プログラム集』、平成20年を参考に作成した。

異年齢・世代間交流プログラム例： **本格そば打ち（二八そば）交流会**

プログラムのねらい	○ 児童生徒と地域の大人との世代間交流の一環として、地域のそば打ち職人から大人も子どもと共にそば打ちを学び、そば打ちの協働を通じて世代間交流の促進を図る。
プログラムの目標	○ そば打ち技術を地域の本職の大人から学ぶ。 ○ 児童・生徒、保護者、地域の大人が共に同じ活動に取り組むことで、そば打ちの達成感や満足感を得る。 ○ そばの試食会や交流を通じて、世代間相互の理解を図る。
対象者	小学生・中学生、保護者、地域の大人
実施時期	年間を通じて可能
所要時間	1日間
準備する教材	5人前あたりそば粉400g、つなぎ粉100g、打粉50～100g（麵のくっつきを防止）を準備。30人の場合はその6倍。 大きな木鉢、水、のし台、麺棒、まな板、包丁、こま板、ザル、コンロ、そばを茹でる大鍋、そばを試食する食器類等、 麺つゆを作る場合はその材料（かつお節、水、醤油、酒、みりん等）
児童・生徒の持ち物	特になし
講師の依頼	そば打ち職人、ないし地域でそば打ちのできる大人

児童・生徒の活動内容	指導・助言者の支援内容
1. そば打ちの準備、水回し	1. そば粉、つなぎ粉、水の準備、粉に水を回し、まとめ耳たぶの硬さにする
2. 練りの体験	2. ボロボロのそば粉をまとめ、100回程度練り、そば玉を作る。これをラップにまとめて20～30分ねかし、さらに200回程度練る
3. 地のし、本のし	3. のし台にそば玉をのせ、打ち粉を振り手で直径30cm程度にのし広げる（地のし）。さらに麺棒を使って直径70cm、厚さ1ミリ程度に広げる（本のし）
4. たたみ、切り、茹で	4. 打ち粉をしてそばを六つ折りにする。たたんだそばを包丁の重みを利用して切る。その後、そばを茹でる
5. そばの試食。子どもと大人の感想や意見交換、交流を行う	5. そばの試食をして感想、意見交換を行い、交流を実施する

異年齢・世代間交流に関するプログラム編成の視点と手順

1. 異年齢・世代間交流のプログラムの内容例

異年齢交流のプログラム例としては例えば、「小学生と中学生の交流会」「中学生から小学生へのお手紙交流」「他校の学生とのスポーツ交流大会」などが考えられます。

世代間交流に関するプログラム例としては、「世代間の意見交換会」「昔の道具やおもちゃづくり」「地域のお年寄りから伝統的行事を学ぼう」など多様な内容が考えられます。

過去に実施された青少年や高齢者を対象とする調査によれば、青少年や高齢者は共に、高齢者から青少年に何かを教える内容のプログラムばかりではなく、同じ活動と一緒にを行うことによる交流の希望率が高い結果が出ています。従って世代間交流プログラムは、「地域の方と一緒にバーベキュー大会」「地域の大人と一緒に絵画教室」「星座観察」「ミニハイキング」のように、異世代で同じ活動と一緒にを行う内容を実施することも期待されます。

2. 異年齢・世代間の交流に関するプログラム作成上の留意点

- (1) 異年齢・世代間の交流に関するプログラムは、異年齢や世代間の交流により相互理解の促進を重視する。
- (2) 異年齢や世代間の交流を通して、他人を思いやる心を涵養する。

3. 異年齢・世代間交流プログラム作成の流れ

第1ステップ

- (1) 異年齢・世代間交流に関する地域行事等、関連資料を収集する
- (2) 異年齢・世代間交流に関する指導が可能な指導者・助言者を調査する

第2ステップ

- (3) 異年齢・世代間交流プログラムの具体的テーマを決定する
- (4) 異年齢・世代間交流プログラムの子どものねらい（目標）を明確化する

第3ステップ

- (5) プログラムに必要な教材・教具、活動場所を準備・確保する
- (6) プログラムの展開の手順を検討する
- (7) プログラムの指導内容を手順に沿って明確にする
- (8) プログラムの活動場所の下見を行う
- (9) 指導・助言者を確保し、指導・助言者との連絡調整を実施する

第4ステップ

- (10) 異年齢・世代間交流に関するプログラムを実施する（交流活動の実施、後片付けを含む）

第5ステップ

- (11) プログラムに対する子どもの振り返り、講師・助言者等スタッフの振り返りを行う
- (12) 交流した側（他校の生徒や地域の大人、高齢者等）の意見聴取等、振り返りを行う
- (13) 次回の事業計画の改善に活かせる点、残された問題点・課題を明確化する

ふり返りの考え方とふり返りのための調査票例



- 1 放課後子ども教室のふり返りの考え方
- 2 子どもによるふり返りのための調査票例
- 3 活動支援者によるふり返りのための調査票例
- 4 プログラム開発の10項目チェックリスト
ープログラム企画者用ー

放課後子ども教室のふり返りの考え方

1. ふり返りとは何か

ふり返りは、まず子ども自身が活動の達成程度を確認し、理解できなかった点や困ったことなどを考える機会とするものです。ふり返りはまた、実施者側にとってはプログラムの実施結果を踏まえて、当初設定したねらいの達成程度の確認を行い、次なる放課後子ども教室のプログラムに生かすことをねらいとして実施されます。

ふり返りをあまり難しく考えるのではなく、はじめは子どもの感想・意見の聞き取りや、あるいは指導・助言に携わった地域の方々の感想・意見、学校関係者の感想・意見・要望などを聞き取ることを中心に実施しましょう。さらに調査票を作成したふり返りを行うなど、より質的・量的な情報収集を可能とする、システムティックなふり返りについても取り組みを検討してみましょう。

2. ふり返りの種類

ふり返りを大別すると(1)子どもの活動のねらいとして設定したものの達成程度をみる「学習成果のふり返り」と、(2)活動支援を行った側の条件整備の程度をみる「活動支援のふり返り」に分けられます。

ふり返りの実施主体は、子ども、活動支援者（企画者、講師・助言者、ボランティア等）の他、活動に直接携わらない第三者（学校関係者、地域の人、専門家等）による実施も考えられます。ふり返りはそのように活動に参加した子どもばかりでなく、活動支援者に携わった者やさらに第三者等の視点からも実施されることにより、次なるプログラム開発に生かせる有効な情報を得ることができます。

さらにふり返りは、プログラムの最後に1回のみ実施すれば良いというものではありません。特に継続的なプログラムの場合は、活動の開始時点や活動途中でふり返りを実施することにより、当該プログラムの改善点が浮かび上がったり、子どもの変化が明らかになる等、プログラム開発に役立つ有効な情報が多く得られます。まずプログラム終了時点でのふり返りを実施することを検討し、その後はさらに複数回のふり返りの実施も検討してみることは重要と言えるでしょう。

ふり返りのために調査票を作成する場合は、以下の観点を踏まえて項目を検討することも良いでしょう。次頁の項目例の(1)～(4)は「学習成果のふり返り」に関連するものであり、(5)～(10)は「活動支援のふり返り」に関連するものです。それらを手がかりとして、各地域の放課後子ども教室の実践に適する独自性のあるふり返り票を作成してみましょう。

■ 学習成果のふり返りのための主な項目例

- (1) 子どもが体験によって得た、新しい知識・技能を調べる項目
- (2) 子どもが体験によって得た知識・技能の、日常生活や学習への応用を調べる項目
- (3) 子どもが体験によって得た、達成感、成就感、満足感、充実感を調べる項目
- (4) 子どもが体験によって得た、今後の活動に対する関心や意欲、具体的に取り組みたい事項を調べる項目

■ 活動支援のふり返りのための主な項目例

- (5) 計画・実施された活動の内容、方法、講師・助言者の指導や態度等、活動自体の計画・実施の善し悪しに関する項目
- (6) プログラムの時間配分（休憩を含めて）や、子どもと指導者とのコミュニケーションのあり方など、活動の運営のあり方に関する項目
- (7) プログラム実施上の、講師・助言者の指導上の工夫点に関する項目
- (8) 指導・助言上の問題点や課題に関する項目
- (9) 活動支援者の立場からの今後のプログラム開発への期待、意見等に関する項目
- (10) 活動支援に携わる関係者の属性（性別、年齢、過去の活動支援の経験等）に関する項目

■ プログラムのテーマ別ふり返りの観点例

◎自然体験・環境学習関係プログラムの学習成果のふり返りの観点例

- (1) 子どもは、自然にふれあう体験・経験をしたか（体験・学習活動の量的評価）
- (2) 子どもは、自然や環境の法則やしぐみ、科学的根拠に基づき考えることができたか（活動・学習内容に関する科学的理解）
- (3) 子どもは、自然や環境について体験し学んだことを日常生活に生かすことができるか（活動・学習内容の日常生活への応用）
- (4) 子どもは、興味・関心を持って取り組めたか（活動・学習内容に対する興味・関心の涵養）
- (5) 子どもは、満足感を得ているか（体験・学習への満足感）
- (6) 子どもは、さらに体験、学びたいことが出てきたか（体験・学習の継続・ひろがりの促進）

◎伝統的文化継承・異文化理解のプログラムのふり返りの観点例

- (1) 子どもは、伝統的文化や異文化に触れ合う体験をしたか（体験活動の量的評価）
- (2) 子どもは伝統的文化や異文化の歴史、その面白さ、継承の意義を考えることができたか（伝統的文化・異文化に関する理解、文化継承の意義の理解）
- (3) 子どもは、興味・関心を持って諸活動に取り組めたか（活動・学習内容に対する興味・関心の涵養）
- (4) 子どもは、満足感を得たか（体験・学習への満足度）
- (5) 子どもは、さらに体験したり学びたいことが出てきたか（体験・学習の継続・ひろがりの促進）

◎食・料理体験プログラムのふり返りの観点例

- (1) 子どもは、食・料理に関する知識を習得したか（食・料理の知識量の評価）
- (2) 子どもは、食・料理に関する技術・技能を向上したか（食・料理に関する技術・技能の向上）
- (3) 子どもは、興味・関心を持って取り組めたか（活動・学習内容に対する興味・関心の涵養）
- (4) 子どもは、満足感を得たか（体験・学習への満足感）
- (5) 子どもは、さらに食・料理に関して体験したい、学びたいことが出てきたか（体験・学習の継続・ひろがりの促進）

◎異年齢・世代間交流プログラムのふり返りの観点例

- (1) 子どもは、異年齢や異世代の対象者との交流体験を増やしたか（交流体験量の評価）
- (2) 子どもは、交流対象者との相互理解を深めたか
- (3) 子どもは、交流体験に興味・関心を持って取り組めたか（交流への興味・関心の涵養）
- (4) 子どもは、交流体験に達成感や満足感を得たか（体験への達成感・満足感）
- (5) 子どもは、異年齢の子どもや異世代の対象者とさらに一緒に行ってみようと思えるところが出てきたか（交流体験の継続・ひろがりの促進）

ここでは、子どもが自己評価として活用できる一般的なふり返りのための調査票例を、前掲の自然体験・環境学習プログラム「森をつくる木々たちを知ろう」を基に示します。(なお、実際に作成する場合は、ひらがなやふりがな等、表現にも注意します)

子どもによるふり返り票の例：自然体験・環境学習プログラムの場合

1. あなたが体験した「森をつくる木々たちを知ろう」プログラムについてお尋ねします。各問について、当てはまる番号の一つに○をつけて下さい。

学習成果のふり返り項目例…知識・技能の習得・日常生活への応用

- (1) あなたはプログラムを体験し、木の種類の違いや特徴が分かりましたか
 1. 違いが良く分かった
 2. 違いはだいたい分かった
 3. 違いはあまり分からなかった
 4. 違いは全く分からなかった

- (2) あなたはプログラムを体験し、葉や樹皮の様子を良く観察できましたか
 1. 葉や樹皮の様子を良く観察できた
 2. 葉や樹皮の様子をだいたい観察できた
 3. 葉や樹皮の様子をあまり観察できなかった
 4. 葉や樹皮の様子を全く観察できなかった

- (3) 樹木の種類として高木、亜高木、低木、草本の違いが分かりましたか
 1. 樹木の種類の違いが良く分かった
 2. 樹木の種類の違いがだいたい分かった
 3. 樹木の種類の違いがあまり分からなかった
 4. 樹木の種類の違いが全く分からなかった

- (4) プログラムで学んだことを生かせば、あなたの家の周りの樹木の違いが分かりますか
 1. 家の周りの樹木の違いが良く分かる
 2. 家の周りの樹木の違いがだいたい分かる
 3. 家の周りの樹木の違いがあまり分からない
 4. 家の周りの樹木の違いが全く分からない

- (5) あなたは、「森をつくる木々たちを知ろう」プログラムを体験し、さらに学びたいことや調べてみたいことが出てきましたか
1. さらに学びたいことや調べてみたいことがたくさん出てきた
 2. さらに学びたいことや調べてみたいことが少し出てきた
 3. さらに学びたいことや調べてみたいことはあまり出てこなかった
 4. さらに学びたいことや調べてみたいことは全く出てこなかった
- (6) あなたは、「森をつくる木々たちを知ろう」プログラムを体験し満足しましたか（楽しかったですか）
1. 非常に満足した（非常に楽しかった）
 2. やや満足した（やや楽しかった）
 3. あまり満足しなかった（あまり楽しくなかった）
 4. 全く満足しなかった（全く楽しくなかった）

2. 次にあなたが体験した「森をつくる木々たちを知ろう」の先生や、プログラムの内容やおすすめ方についてお尋ねします。

- (1) 「森をつくる木々たちを知ろう」プログラムで、木々や樹皮の違いを説明した先生のお話は分かりやすかったですか
1. とても分かりやすかった
 2. だいたい分かりやすかった
 3. あまり分からなかった
 4. 全く分からなかった
- (2) ハイキングの歩く時間や歩く量は適切でしたか
1. ちょうど良い時間と量だった
 2. だいたい良い時間と量だった
 3. 少し歩く時間や量が長すぎた・短すぎた
 4. とても歩く時間や量が長すぎた・短すぎた
- (3) 先生やボランティアの方々は、皆さんの安全を良く考えて、危ないところに行かないよう注意をしたり、体調の変化に気をつけてくれましたか
1. とても良く考えてくれた
 2. だいたい考えてくれた
 3. あまり考えてくれなかった
 4. 全く考えてくれなかった

(4)「森をつくる木々たちを知ろう」のプログラムは、皆さんが自然について知るために役立つ体験が順序立てて考えられていましたか

1. とても良く考えられていた
2. だいたい良く考えられていた
3. あまり考えられていなかった
4. 全く考えられていなかった

(5)「森をつくる木々たちを知ろう」のプログラムは、学んだことについて皆さんがお友達と話し合ったり、発表しあう機会が自然体験の後に準備されていましたが

1. 友達と話し合う機会や発表の機会がたくさん準備されていた
2. 友達と話し合う機会や発表の機会が少し準備されていた
3. 友達と話し合う機会や発表の機会があまり準備されていなかった
4. 友達と話し合う機会や発表の機会が全く準備されていなかった

3. 「森をつくる木々たちを知ろう」プログラムを体験して、何か困ったことや、今後の希望がありますか。あれば、以下に自由に書いて下さい。



活動支援者のためのふり返り票の例

1. あなたが携わったプログラムの内容、時間帯、場所、教材・教具についてお尋ねします。各項目について、当てはまる番号の一つに○を付けて下さい。

非常に当てはまる
やや当てはまる
どちらとも言えない
やや当てはまらない
全く当てはまらない

5 - 4 - 3 - 2 - 1

(例) 活動内容に多くの子どもは感心を示した

⑤ - 4 - 3 - 2 - 1

(1) 活動内容に多くの子どもは感心を示した

5 - 4 - 3 - 2 - 1

(2) 活動の時間帯は適切であった

5 - 4 - 3 - 2 - 1

(3) 活動の場所は適切であった

5 - 4 - 3 - 2 - 1

(4) 活動に必要な教材や教具は整えられていた

5 - 4 - 3 - 2 - 1

(5) 予定された活動を行うための活動時間は十分であった

5 - 4 - 3 - 2 - 1

2. 次に、あなたが携わったプログラム運営上の問題点についてお尋ねします。

各項目について、当てはまる番号の一つに○を付けて下さい。

非常に当てはまる
やや当てはまる
どちらとも言えない
やや当てはまらない
全く当てはまらない

(1) 活動支援において、指導・助言者の数は十分であった

5 - 4 - 3 - 2 - 1

(2) 他の活動支援に携わった方との情報共有はよく行われた

5 - 4 - 3 - 2 - 1

(3) 他の指導・助言者は熱心に活動支援に携わった

5 - 4 - 3 - 2 - 1

(4) プログラム実施上、学校側との連携は十分にとれていた

5 - 4 - 3 - 2 - 1

(5) プログラム実施上、問題や課題が浮かび上がった

5 - 4 - 3 - 2 - 1

3. 上記2.の(5)でプログラム実施上の問題や課題が浮かび上がったについて「5. 非常に当てはまる」か「4. やや当てはまる」と回答した方にお尋ねします。

具体的に浮かび上がった問題点について、以下にその内容を記述して下さい。

()

4. 今後の子どもの放課後活動の支援について、あなたご自身のお考えをお尋ねします。

	非常に当てはまる	やや当てはまる	どちらとも言えない	やや当てはまらない	全く当てはまらない
(1) 自分は、今後も放課後子ども教室の活動支援を続けたい	5	4	3	2	1
(2) 自分は、今後の放課後子ども教室の活動支援の可能な人を知っている	5	4	3	2	1
(3) 自分は、今後の放課後子ども教室の活動に役立つような教材・教具について知っている	5	4	3	2	1
(4) 自分は、今後放課後子ども教室の企画にも携わりたい	5	4	3	2	1
(5) 自分は、今後の活動支援のアイデアがある	5	4	3	2	1

5. 上記4.の(5)で今後の活動支援のアイデアがあるについて「5. 非常に当てはまる」「4. やや当てはまる」と回答した方にお尋ねします。

具体的に活動のアイデアについて、よろしければその内容をお知らせ下さい。

()

6. 最後に今後の放課後子ども教室のプログラムについて、何かご意見やご感想がありましたら、以下にお書き下さい。

()

本調査にご協力を頂き、誠にありがとうございました。

放課後子ども教室のプログラム作成の10項目チェックリスト：
プログラムの企画者用

- 1. プログラムのテーマは具体的で、子どもにとって魅力あるものになっていますか？
- 2. プログラムの活動内容は、子どもの経験の違いや、レベルの違いに対応するものとなっていますか？違いがある場合、グループ分けをする等の配慮を行いましたか？
- 3. 活動の展開にあたり、指導者・助言者は（ボランティアを含めて）十分な数と質が確保できましたか？
- 4. ボランティアの配分は適切であり、個人に過重負担はないですか？
- 5. 活動支援のために、地域の専門性を有する指導・助言者を活用できましたか？
- 6. 子どもの活動は、地域の様々な学習資源（地域特性、関連する施設、自然環境など）を活かすものとなっていますか？
- 7. 活動の実施に必要な教材や教具は、子どもの活動のレベルや数に見合っって十分な量と質を確保できましたか？
- 8. 子どもの保護者に対する情報提供の方法や、緊急時の際の連絡手段・方法は具体的に決められていますか？
- 9. 地域の他の学校（小・中学校、高等学校、大学等）や図書館、博物館、美術館などの社会教育施設、あるいは企業、NPO、地域の自治会やPTA等関連団体等と連携・協力した活動を取り入れましたか？
- 10. 活動の終了後、子ども、保護者、学校、ボランティア等指導者の感想や意見、要望を聞くふり返りを実施しましたか？

